

一般国道475号 東海環状自動車道

# 宮山遺跡(第2次)・大久保城跡

I 前言

II 位置と歴史的環境

III 宮山遺跡(第2次)

IV 大久保城跡

2003. 3

三重県埋蔵文化センター

# 序

地中に眠る埋蔵文化財は、その昔、この日本列島に暮らした人々の生の証しであります。そこには、その時代を生きぬいた人々の知恵があり、また今日を生きる私たちの原点ともいべきものが感じられます。埋蔵文化財は私たちの貴重な財産として、また精神的な根源として、本来は手をつけずに保存しておきたいものでありますが、現代を生きる私たちの生活のためには、必要最小限の道路建設は欠かせないものでもあります。

そこで、埋蔵文化財の保護と道路建設との調和を図るため、三重県教育委員会と国土交通省等関係機関との間で協議を行い、その結果どうしても保存のできない遺跡に関して発掘調査を行い、記録保存をして後世に伝えることとなりました。今回、東海環状自動車道建設事業により、埋蔵文化財の一部の実態が日の目を見ることとなりましたが、遺跡は調査後その姿を消してしまいます。非常に残念なことです。今回の貴重な成果が今後の考古学研究の一助となるとともに、文化財保護に関する深化・普及につながっていきますことを念じてやみません。

最後になりましたが、調査にあたり、国土交通省中部地方整備局、同北勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、地元各町教育委員会等、関係機関および地元自治会をはじめとする多くの方々から温かいご理解とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

# 例 言

1. 本書は、三重県員弁郡大安町大字片樋字宮山<sup>みややま</sup>に所在する宮山遺跡の第2次発掘調査報告書（F地区）および同町大字片樋字大久保に所在する大久保城跡の発掘調査報告書である。
2. 宮山遺跡(F地区)については『東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』（三重県埋蔵文化財センター 2002）に、大久保城跡については『東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター 1997）に、その概要を報告しているが、本書をもって正報告とする。
3. 一般国道475号東海環状自動車道建設事業に伴い、宮山遺跡に関する調査は平成13年度に国土交通省中部地方整備局から、大久保城跡に関する調査は平成8年度に建設省中部地方建設局（当時）から三重県が委託を受けて実施した緊急発掘調査である。
4. 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局（建設省中部地方建設局）の負担による。
5. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター		
	調査第二課第一係		
	《宮山遺跡（F地区）》		《大久保城跡》
	主査兼係長	森川幸雄(調整)	主査兼係長 清水正明
	主 事	山口聡嗣(調査担当)	主 事 片岡 博(調査担当)
	臨時技術補助員	田中美穂	
現場作業	社団法人	中部建設協会	
6. 当報告書の編集と大久保城跡以外の執筆は、山口聡嗣が行った。大久保城跡の執筆については片岡博と山口聡嗣が協力して行った。写真撮影については、遺構は調査担当者が行い、遺物は山口聡嗣が行った。なお、文責は目次と文末にも表記した。また、以下の者の補助があった。  
新貝里美・長野恵子・山中陽子（大久保城跡は釜谷実加代・宮本理美・樋口愛）
7. 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、大安町教育委員会、国土交通省中部地方整備局（建設省中部地方建設局）にご協力を頂いた。また、整理・報告書作成において、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。〔敬称略〕  
藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）・松井一明（袋井市教育委員会）  
伊藤徳也（三重県立神戸高等学校）
8. 本書で示す方位は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。当遺跡では磁北は約6度50分（平成6年現在、国土地理院）西偏している。
9. 本書で使用した遺構表示略記号は、以下のとおりである。  
SD：溝      SK：土坑・土壙      SX：墳墓
10. 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（19版、日本色研事業社、1997）に準拠した。
11. 宮山遺跡F地区に関して本書で報告する遺構番号は調査時点および概報で付与した番号を踏襲せず、第1次調査で使用した遺構番号に続けるため新たに改称したものである。
12. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

# 本文目次

I	前言	(山口聡嗣)	1
II	位置と歴史的環境	(山口聡嗣)	5
III	宮山遺跡(第2次)	(山口聡嗣)	11
	1 層位と遺構	(山口聡嗣)	12
	2 遺物	(山口聡嗣)	17
	3 結語	(山口聡嗣)	19
IV	大久保城跡	(片岡博・山口聡嗣)	23
	1 層位と遺構	(片岡博・山口聡嗣)	24
	2 遺物	(片岡博・山口聡嗣)	24
	3 結語	(片岡博・山口聡嗣)	25

# 挿図目次

## 〈 宮 山 遺 跡 〉

第1図	調査地区割図	2	第11図	S K 4 4 実測図	15
第3図	遺跡位置図	6	第12図	S D 4 5 実測図	15
第4図	周辺地形図	8	第13図	出土遺物実測図	16
第5図	調査地区割図	9	第14図	S X 2 0 実測図	19
第6図	遺構配置図	10	第15図	S X 2 0 考察図①	20
第7図	F地区遺構図	13	第16図	S X 2 0 考察図②	20
第8図	S X 4 2 実測図	14	第17図	麻績塚1号墳測量図	20
第9図	S X 4 2 土器出土状況図	15	第18図	E, F地区遺構配置図	21
第10図	S K 4 3 実測図	15			

## 〈 大久保城跡 〉

第2図 調査区位置図 …………… 3	第19図 調査区実測図 ……………24
第3図 遺跡位置図 …………… 6	第20図 出土遺物実測図 ……………24

## 表 目 次

第1表 宮山遺跡（F地区）出土遺物観察表(1)……………17
第2表 宮山遺跡（F地区）出土遺物観察表(2)……………18

## 図 版 目 次

### 〈 宮 山 遺 跡 〉

P L . 1 F地区遠景	P L . 5 S K 4 3
F地区全景	S K 4 4
P L . 2 F地区全景	S D 4 5
P L . 3 S X 4 2 検出状況	作業風景
S X 4 2 土器出土状況	P L . 6 出土遺物
P L . 4 S X 4 2	
S X 4 2	

### 〈 大 久 保 城 跡 〉

P L . 7 大久保城跡全景
大久保城跡出土遺物

# I 前 言

## 1 原因事業の概要

東海環状自動車道は、名古屋市を中心とする30～40km圏に位置する四日市市・大垣市・岐阜市・瀬戸市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ、延長約160kmの高規格幹線道路である。名古屋市と周辺都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和を図り、都市全域の道路機能の回復を図るものである。三重県の北勢地方では道路網の充実、四日市港の集積拡大による活性化、内陸部の適正な開発等に寄与することが期待されている。

三重県内における当自動車道は、四日市北JCTで第二名神自動車道と分岐後、員弁川の右岸を北上し、東員町・員弁町・大安町を通り北勢町に至る。その後、岐阜県養老町と連絡する計画になっている。

平成2年度に「一般国道475号東海環状自動車道(北勢～四日市)」として員弁郡北勢町阿下喜～四日市市北山町の区間、延長14.4kmが事業化された。また、平成4年1月21日に三重県知事により「東海環状自動車道」の都市計画化が決定された。計画区間は四日市市伊坂町から員弁郡北勢町阿下喜で、計画延長は18.7kmである。

## 2 調査に至る経緯

一般国道475号東海環状自動車道計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、平成2年度の事業化により同年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、三重県埋蔵文化財センターは、平成4年度に四日市市・東員町・員弁町・大安町・北勢町・藤原町の各教育委員会と「東海環状自動車道等にかかる文化財保護連絡会議」を開催した。さらに計画予定地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を文化財保護および関連開発事業計画にかかる三重県教育委員会と建設省中部地方建設局(当時)間で行い、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになった。

事業の開始にあたり、平成6年4月1日付で建設省中部地方建設局(当時)と三重県との間で、事業

地内に存在する埋蔵文化財の適切な保護措置を講じるための事前調査について、「協定書」を締結した。また、年度毎に「委託契約」を締結している。

その後、事業の進捗状況から平成13年3月13日付で「変更協定書」を締結した。

事前調査の調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。また、調査体制の強化・充実をはかるため「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づき、平成7～9年度に東員町、平成10～12年度に北勢町の各教育委員会から一名ずつ職員の派遣を得た。

なお、現地作業(土工部門)は、調査の円滑な推進を期して、建設省中部地方建設局(当時)が社団法人中部建設協会に委託した。このため、事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局(当時)・三重県・中部建設協会の三者間で「一般国道475号東海環状自動車道(北勢～四日市)埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、事業を推進している。その後も、事業の進捗状況により必要に応じて三者協議を行い、「変更協定書」により工程の細部調整や計画および見直しを行っている。また、県は中部建設協会に「作業要領」を提示している。

平成13年1月より、省庁再編のために建設省は国土交通省へと再編され、三者協議も国土交通省中部地方整備局・三重県・中部建設協会の間で行われることになった。

## 3 調査の経過と体制

### (A) 宮山遺跡

宮山遺跡の現地調査は、東海環状自動車道本線部分の29,380㎡を調査対象とし、平成6～7年度および平成10年度、平成13年度に実施した。

[平成6年度]

11月に範囲確認調査を一部実施して、12,260㎡について遺跡の広がり確認された。

[平成7年度]

平成6年度に確認された遺跡範囲について、前述のような理由から、やむなく発掘調査を実施して記

録保存を図ることになった。平成7年5月8日～7月31日にB・D地区3,250㎡、同年9月4日～平成8年1月18日にA・C・E地区8,630㎡の本調査を第1次調査として行った。また平成7年12月に、前回未買地の一部について範囲確認調査を実施し、1,200㎡について遺跡の広がり確認された。

〔平成10年度〕

6月に、未買地の残り716㎡について範囲確認調査を行ったが、最近の耕作に伴う溝等の検出と現代の遺物しか検出されなかったため、当該範囲は本調査範囲から除外した。また、平成7年度の範囲確認調査により遺跡の広がりが認められた1,200㎡について、6月と平成11年1月にグリッドとトレンチによる精査を行い、遺跡の範囲を1,050㎡とした。

〔平成13年度〕

平成10年度に遺跡範囲が確認された1,050㎡について、前述のような理由から、やむなく発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。これが、本報告書において報告される第2次調査である。地区名は、第1次調査（A～E地区）に引き続き行われる関係からF地区とした。

なお、第1次調査については既に平成10年度に報告書を刊行している。

第1次調査（平成7年度）から後の、平成10年度～同14年度の宮山遺跡にかかわる体制は、以下のとおりである。

〔平成10年度〕

主幹兼調査第二課長	吉水康夫
第一係長	森川幸雄
技師	杉崎淳子
主事	今尾宏記
	(北勢町教育委員会より派遣)

〔平成13年度〕

主幹兼調査第二課長	新田 洋
主査兼第一係長	森川幸雄
主事	山口聡嗣
臨時技術補助員	田中美穂

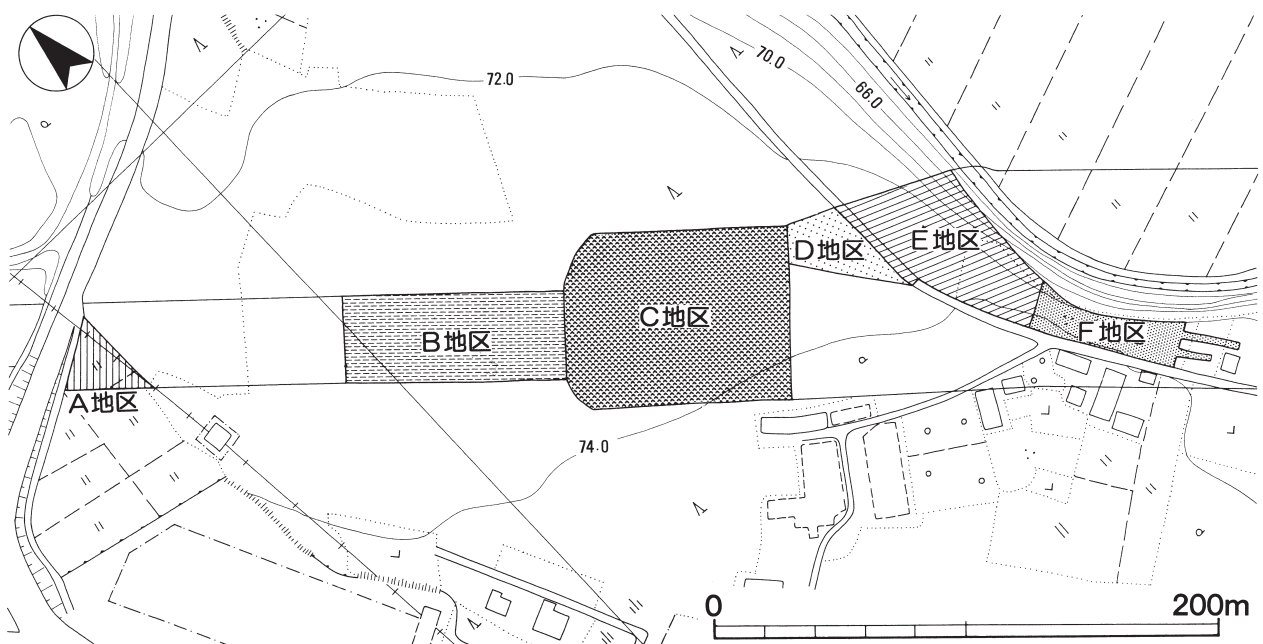
〔平成14年度〕

主幹兼調査研究グループGL	山田 猛
主査	山口聡嗣

《宮山遺跡（第2次）調査日誌(抄)》

(括弧内は調査時の遺構番号)

4月23日	調査前写真撮影
25日	重機による表土掘削開始
27日	表土除去完了、地区杭設定、レベル移動
5月9日	作業員による遺構掘削開始
14日	方形周溝墓SX42(SX2)検出、 SX42(SX2)遺構検出状況写真撮影、 サブトレンチ土層写真撮影
15日	サブトレンチ土層断面図作成
17日	SX42(SX2)遺構掘削開始



第1図 宮山遺跡調査地区割図（1：3,000）

- 25日 SX42(SX2)バルト土層断面写真撮影、  
バルト土層断面図作成(～30日)
- 29日 SX42(SX2)周溝内北西部土器、出土  
状況写真撮影および出土状況図作成、  
土器取り上げ
- 30日 土器取り上げ完了
- 6月 1日 SX42(SX2)完掘写真撮影(～4日)
- 8日 SK43(SK6)遺構掘削開始
- 11日 SK43(SK6)バルト土層断面写真撮影  
(～12日)
- 12日 SK43(SK6)バルト土層断面図作成  
(～13日)
- SK44(SK9)、SD45(SD10)遺構  
掘削開始
- 18日 SK44(SK9)、SD45(SD10)バルト  
土層断面写真撮影
- 25日 SD45(SD10)バルト土層断面図作成  
調査区南側トレンチ掘削
- 26日 SK44(SK9)バルト土層断面図作成
- 28日 遺構別完掘写真撮影(～7月2日)
- 7月 2日 1/20 遺構実測図作成  
(方形周溝墓付近)
- 3日 調査区全景写真撮影(スカイスター)
- 4日 1/20 遺構実測図作成(～11日)

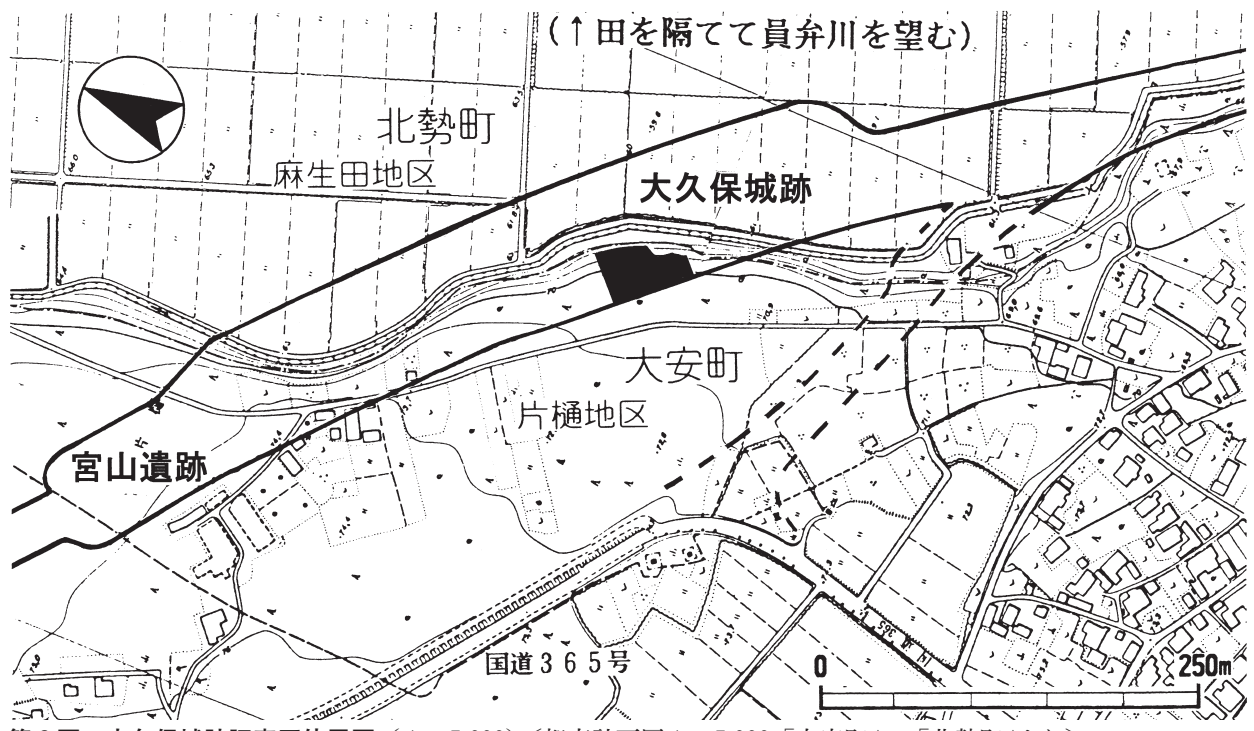
- 5日 調査区全景写真撮影(ラジコンハリ)
- 9日 コサック開始(～17日)
- 11日 調査区西壁土層断面図作成(～13日)
- 17日 SX42(SX2)周溝内コンタ作成
- 18日 引渡し

なお、出土遺物のうち、折り返し口縁壺に関しては袋井市教育委員会の松井一明氏から、近世陶磁器類に関しては瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏からのご教示を受けた。第2次調査の資料整理・報告書作成業務は平成13年度から同14年度にかけて実施した。

**(B) 大久保城跡**

平成5年3月に、員弁川が青川と合流する地点の右岸段丘上の一般国道475号計画路線内を中心に、地形測量を実施した。その結果、段丘上面には段丘崖と直交する幾条もの石列の存在が確認された。石列は人頭大かそれ以上の川原石で構成され、互いに平行な位置関係にあった。石列の長さは長いものでは50mをこえ、その間隔は狭いものでは4m、多くは5～6mを測った。

平成6年度の範囲確認調査で、地形測量範囲の南端に近い部分において段丘崖にほぼ垂直に切り込むV字形の大溝の存在が確認できた。そのため、大久保城跡の本調査はこの大溝を含む1,420㎡に調査区



第2図 大久保城跡調査区位置図 (1:5,000) [都市計画図1:5,000「大安町」・「北勢町」より]



を設定して行うことを決定し、平成8年8月26日から9月27日の予定で発掘調査を実施した。なお、大久保城跡の現況として報告された石塁・土塁は路線予定範囲外のため、今回の調査範囲には含まれていない。また、今回の調査区は、旧所有者により土地が細分され個別に管理・利用されていたため、部分的にかなりの攪乱を受けていると考えられる。表土から遺構面に至るまでの掘削は基本的に人力によって進めたが、途中の状況判断により調査面積の約半分の表土掘削を機械掘削に切り替え、検出のみを人力で行った。

## 4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

### （A）宮山遺跡

- ・法第58条の2第1項

（県教育委員会教育長あて）

平成13年4月27日付教理第43号

- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

（員弁警察署長あて）

平成13年12月4日付教ス生第8-4号

（県教育長通知）

### （B）大久保城跡

- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）

平成8年7月22日付教文第1711号

- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

（員弁警察署長あて）

平成9年4月11日付教文第6-50号

（県教育長通知）

## 5 調査の方法

共通するものとして、以下の方法を用いた。

調査区は、国土座標にあわせて4m間隔に地区杭を設置した。地区杭は北から南へはアルファベットを、西から東へは数字を付し、それらを組み合わせで各地区を設定した。また、地区名は北西隅の地区杭を基準とした。遺構カード（1/40の遺構略測図）や遺物の取り上げについては、この地区名を用いた。

写真は、白黒およびカラーリバーサルフィルムを

用い、35mm判・ブローニー判・4×5判で撮影し、補助的に35mmカラーフィルムを用いた。写真についてはアルバムに整理し、各カットの内容を記した一覧表を作成している。

### （A）宮山遺跡

遺構の番号については、ピットについては各地区ごとに発見順に通し番号をつけて遺構カードに記録し、その他の遺構については発見順に全体を通して通し番号を付け、遺構カードの最初の記録用紙に記入していった。発掘調査の時点では、遺構番号は1番からの通し番号を付けたが、本報告書においては、第1次調査の続きの42番から始めて、改めて遺構番号をつけなおした。

土層断面図・遺構平面図はそれぞれ縮尺1/20で作成し、各遺構別セクションベルトの土層図および土器の出土状況図は縮尺1/10として作成した。

写真については、上記の他にデジタルカメラを補助的に使用した。

出土遺物は、実測するものとそうでないものに分け、各遺構別にまとめた状態でコンテナに入れて収蔵している。コンテナには箱番号を与え、別一覧表を作成している。

実測された遺物は、実測図と照合できるように遺物と図面の両方に登録番号を記入している。さらに、報告書掲載遺物は、報告書の番号と同じ図版番号を与えている。両者は本書の遺物一覧表で対照できる。

### （B）大久保城跡

上記のような小地区を設定したが、調査の進行にともない、遺構等が認められなかったため、9月6日以降は遺構カード（1/40）を使用せず、遺物の取り上げに小地区名を用いるにとどめた。調査区遺構図については、全地区の検出を完了した10月9日に、オートリダクション光波アリダード（電子平板）を用いて縮尺1/100で現地作成した。なお、土層断面図及びトレンチ土層図は、縮尺1/20で作成した。

出土遺物はコンテナに入れて収蔵し、実測図と照合できるように遺物と図面の両方に登録番号を記入している。さらに、報告書掲載遺物は、報告書の番号と同じ図版番号を与えている。（山口聡嗣）

## Ⅱ 位置と歴史的環境

### 1 地理的環境

宮山遺跡が所在する三重県北部は、北勢地域とも呼ばれ、東は木曾三川や伊勢湾を隔てて愛知県と、北は養老山系を隔てて岐阜県と、西は鈴鹿山系を隔てて滋賀県と接している。

宮山遺跡は、鈴鹿山系に端を発し、北勢地方を横断して伊勢湾に注ぐ員弁川右岸の洪積台段丘上に立地する。沖積低地との比高は10m以上あり、その境界には急峻な段丘崖が形成されている。また、遺跡はゆるやかに起伏しながら北側に向けて傾斜し、員弁川支流の青川によって画される。青川の川底は巨礫の厚い層のために川水の大半は伏流水となり、簡易水道やマンボの水源となっている。そのような理由から、宮山遺跡内にもマンボがはまっている。また青川は、現在は河川改修によってあまり見られなくなったが、その名の起源のひとつである青い石（輝緑凝灰岩）が多い川であり、遺跡の立地する段丘中にも青い石が多く混ざっている。遺跡付近は、地層的には更新世中位Ⅱ段丘堆積物上にあり、F地区の現状は、茶畑や畑に利用されていた。

大久保城跡は、宮山遺跡に隣接する員弁郡大安町片樋字大久保に所在し、同町片樋かたひと同郡北勢町麻生田あうだの町境にあって、青川と合流する地点より少し下流の員弁川右岸の河岸段丘台地上に立地している。

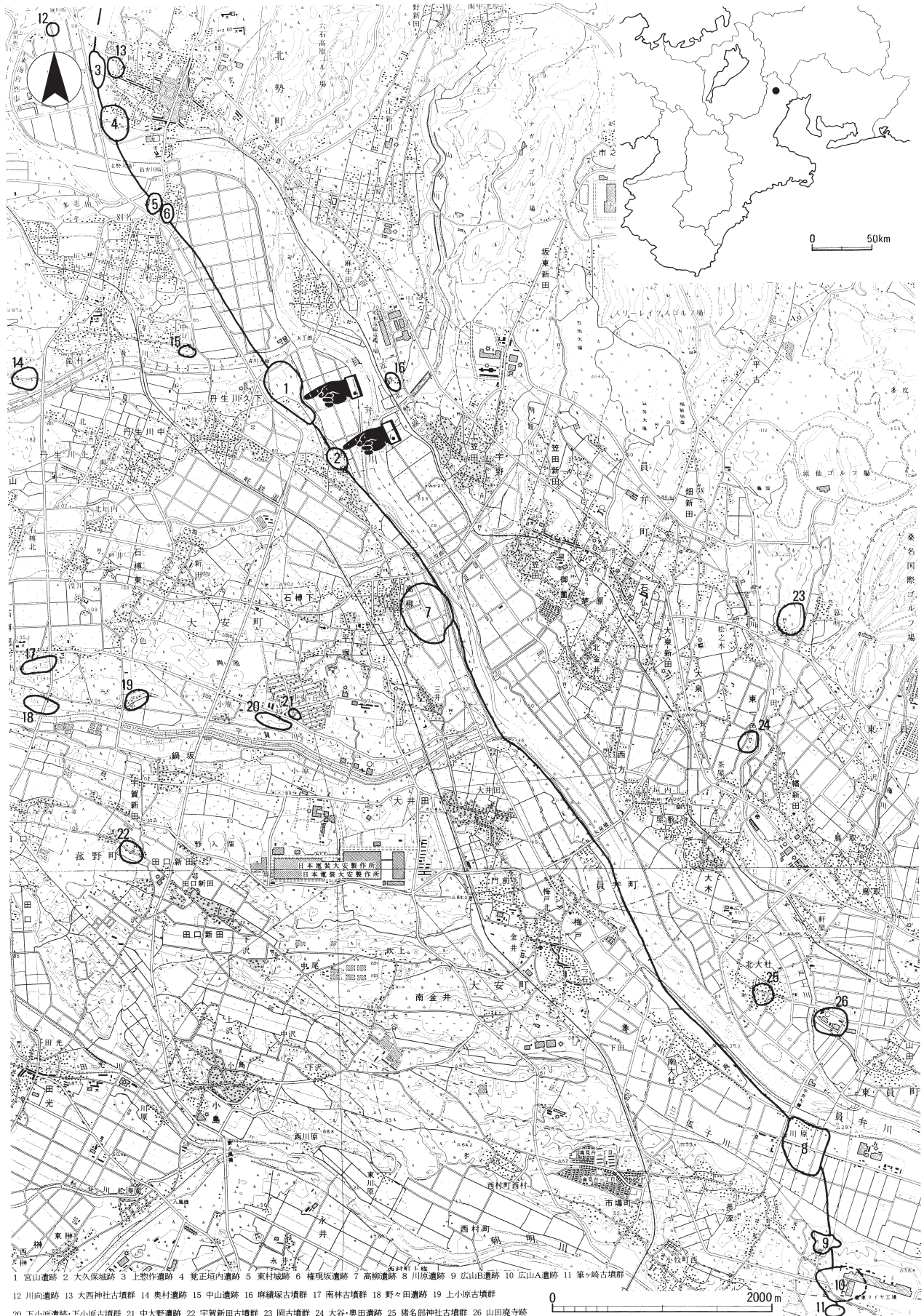
大久保城跡の東側段丘下には員弁川の氾濫原が広がり、その比高は約9mである。段丘崖部分に土砂の崩落防止措置等は施されておらず、河原礫を包含する砂質土が風雨にさらされ崩落し、段丘崖下に堆積している。そのため、崖壁は逆勾配で氾濫原にせり出し、不安定な景観を呈している。現状は山林であったが、太平洋戦争中は食料増産計画のもとに畑として耕作されていたそうである。山林は建築用材を中心とした戦後の植林によるもので、雑木林も混在する。当台地は所有が細分化され、土地の管理状況や利用状況も場所により差が見られた。

### 2 歴史的環境

#### (A) 周辺の遺跡

宮山遺跡(1)及び大久保城跡(2)周辺では、北勢町川向遺跡(12)において旧石器時代のものとみられるナイフ形石器が出土したほか、大安町や員弁町においても石器類の出土が確認されている。ただし、その数はあまり多くない。

縄文時代の遺跡としては、宮山遺跡と同じ青川流域には、奥村遺跡(14)や大量の縄文土器等が出土した北勢町最大の縄文遺跡である中山遺跡(15)がある。南の宇賀川流域をみると、左岸には上流の方から、押型文土器や繊維土器が確認された照光寺遺跡、早期から奈良時代にかけて営まれ、石剣などの有力者の存在をうかがわせる出土遺物がみられた野々田遺跡(18)の他、下小原遺跡(20)、中大野遺跡(21)があり、右岸では奥仙遺跡において多数の縄文土器等が発見され、縄文時代以来の大集落の存在が推定されている。員弁川流域をしてみると、左岸の北勢町阿下喜地区に縄文中期から後期の竪穴住居や屋外炉・埋甕・集石遺構が確認された川向遺跡<sup>②</sup>、早期から後期の遺物の確認された上惣作遺跡<sup>③</sup>(3)、竪穴住居の可能性もある土坑や後期縄文土器(埋設土器を含む)・石器が確認された覚正垣内遺跡<sup>④</sup>(4)がみられる。その対面の右岸には、縄文土器や石器が確認された東村遺跡<sup>⑤</sup>(5)、後期から晩期の縄文土器片や石器とともに後期の土坑や晩期の合口土器棺墓が検出された権現坂遺跡<sup>⑥</sup>(6)がある。宮山遺跡付近では、対岸の左岸に支流の山田川と明智川にはさまれる形で立地する北野遺跡があり、縄文土器片や石器が確認され前期後半から存在する遺跡と考えられている<sup>⑦</sup>。明智川下流には縄文遺物の包含地として旭遺跡がみられるが、その他顕著なものは見られない。また、員弁川と明智川との合流点の右岸には高柳遺跡(7)があり、チャート片が採集されている<sup>⑧</sup>。さらに下流、支流の戸上川が員弁川と合流する手前の左岸には山田遺跡(26)があり、縄文晩期の合口土器棺墓1基とともに同時期の土器片が確認されており、晩期後半



第3図 遺跡位置図 (1 : 50,000) 【この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図(「阿下喜」・「菰野」を複製したものである) (承認番号平14部複、第167号)】

の突帯文土器群を携えた人々が営んだ遺跡で、墓域としても利用されていたと想定されている<sup>⑨</sup>。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べあまり発展しなかった。員弁川右岸では、宮山遺跡北方の東村城跡において前期の遠賀川式土器に始まり、中期の瓜郷式・貝田町式、後期の山中式などの土器が確認されている<sup>⑩</sup>ほかは、青川左岸の奥村遺跡、磨製石鏃や石包丁破片などの石器が確認された宇賀川左岸の野々田遺跡がある程度である。員弁川左岸では、川向遺跡で包含層出土のものとして後期の弥生土器が確認されている<sup>⑪</sup>。縄文時代と古墳時代から中世にかけての遺跡の上惣作遺跡・堂正垣内遺跡・権現坂遺跡においても、現状では弥生期の資料に乏しい。明智川流域では、左岸の旭遺跡で石鎌状石器が確認されている。員弁川支流の戸上川右岸の大谷遺跡(24)では、4戸の弥生住居跡と大型蛤刃石斧が確認された。

古墳時代の遺跡としては、古墳は宇賀川流域に多くみられ、山間部にはみられない傾向がある。宮山遺跡から見て員弁川の沖積地をはさんだ対岸の台地部に、全長43mの前方後方墳(1号墳)を中心とした麻績塚古墳群(16)がある。現状では2基のみだが、当初はさらに多くの古墳が存在したと推定される。その他阿下喜地区の員弁川左岸には町割古墳・大西神社古墳群(13)・鳥取古墳・堂ノ上古墳群・別当古墳がある。山田川流域には、右岸に二子山古墳・前述した麻績塚古墳群、左岸に北野中古墳群、明智川左岸に下笠田古墳、戸上川右岸に猪名部神社古墳群(25)、左岸に平子古墳群・岡古墳群(23)・西畑古墳がみられる。また、宇賀川沿いには、左岸に南林古墳群(17)・野々田古墳群・上小原古墳群(19)・下小原古墳群(20)、右岸には宇賀新田古墳群(22)・大辻古墳群などの十基前後を単位とする小古墳群が点在してみられるほか、尼ヶ谷古墳群・野添古墳・石塚古墳群・江丸古墳などがみられる。これらの中で、猪名部神社1号墳は前方後円墳で全長29mを測り、員弁郡の古代豪族猪名部氏の祖先との関係が推定されている。近接する2号墳は径22mの円墳である。また、岡1号墳は全長41.5mの前方後円墳、西畑古墳も全長20mの前方後円墳である。このように、戸上川流域にも有力な勢力の存在が想定されている。

その他、接近する員弁川と朝明川にはさまれる丘陵上には筆ヶ崎古墳群(11)があり、横穴式石室が想定されている。

古墳時代の集落遺跡は、上惣作遺跡において前期の竪穴住居が検出され、元屋敷式段階に相当する土器が出土している<sup>⑫</sup>。この時期の遺跡は他には見当たらないが、古墳時代も末になると東員町の新野遺跡・西山遺跡のような、長期にわたり存続する集落がおこってくる。これらの遺跡からは、フィゴ羽口や鉄滓が出土しているが、この他にも周辺では、小牧北遺跡でフィゴ羽口と鉄滓<sup>⑬</sup>が、中野山遺跡・北山C遺跡で鉄滓が発見されている。現在、この近くには大鐘町という地名がある。これは古来よりの名残を残した地名であり、『和名抄』の「大金郷」に比定されている<sup>⑭</sup>。これら遺物の出土や地名の由来などから考え合わせ、この付近では鍛冶に関連する集団が存在していた可能性が想定されている。

飛鳥・奈良時代以降になると、川向遺跡、上惣作遺跡、権現坂遺跡、東村城跡、奥田・大谷遺跡(24)、奴女里溜古窯跡群、北野遺跡、段遺跡、川原遺跡(8)、広山B遺跡(9)、広山A遺跡(10)や前述の新野遺跡、西山遺跡などで、多くの遺構遺物が確認されるようになる。

中世には、奉公衆として北方一揆や十ヶ所人数に属した勢力が多くみられるようになり、上木城(片山氏)、東村城、治田城・中山城(治田氏)、大久保城(木村氏)、上笠田城・下笠田城(多湖氏)、宇野城(後藤氏)、大井田城・梅戸城(梅戸氏)、北金井城(田能村氏)、大泉城(三浦氏)、大木城(大木氏)、山田城(青木氏)、長深城(富永氏)、中上城(坂氏)、志知城(島田氏)、星川城(春日部氏)などが員弁川兩岸に築かれた。それらの勢力は「北勢四十八家」とも呼ばれ、信長が伊勢に侵攻してくるまで、中央とのつながりを持ちつつ、有力な勢力としてこの地方に君臨していた。

員弁郡内にあった20あまりの中世城館の多くは、員弁川の氾濫原に面した段丘上に築かれていたように、大久保城跡の位置も眺望のよい好立地にあるといえよう。

## (B) 宮山遺跡第1次調査の概要<sup>⑮</sup>

既に報告書を刊行している第1次調査の調査区は、

今回の調査範囲に隣接する地域であり、関連するので、ここで第1次調査の成果を確認しておく。

宮山遺跡は、以前から縄文時代の遺跡として知られている。特に第1次調査区の東側にあたる「団子の宮跡」と呼ばれる地点は特に遺物が集中して採集される所として注目されていた。大安町片樋に所在する<sup>おおみわ</sup>大神社の寺宝とされている石剣・石棒・御物石器は、ここから出土したといわれている。

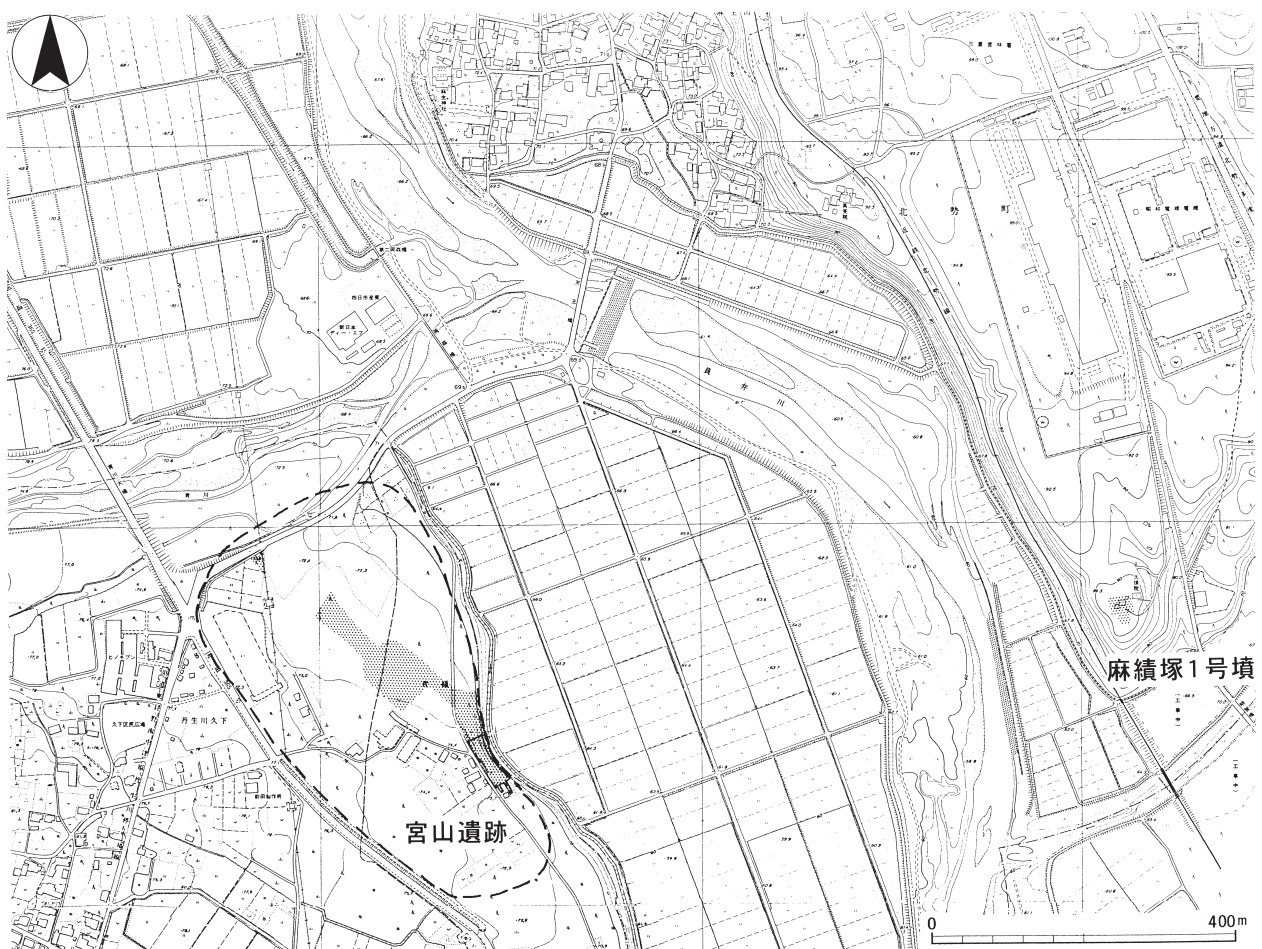
第1次調査では、縄文土器が出土している。D・E地区においては、中期や晩期のもと考えられるものも少しみられるが、中津式～福田KⅡ式に属する後期前半のものが中心である。

B地区においては晩期の土器もみられた。突帯文系のものと条痕文系のものがあり、土器棺墓ではその両方が用いられているものもあった。条痕文系のものは、条痕の特徴や口縁部の形態などから「櫻王式」に並行するものとみられる。C地区では小片ながら浮線文系の土器とみられる浅鉢片が出土している。また、B地区では20基、C地区では2基の環

状(あるいは多角形にめぐる)小柱穴群が検出されており、縄文晩期の平地住居跡の可能性が考えられている。その住居構造はかなり簡易なもので、各住居跡の重複が著しく炉跡も1基(地床炉)しか検出されていないことから、短期間あるいは季節的に設営・廃棄を繰り返したもので、同時に存在する住居跡は少ないと推定された。

弥生時代にはいると、B地区で1棟、C地区で12棟の竪穴住居跡が検出されている。それらはすべて弥生中期のもので、平面形を見ると、円形のもの1棟(B地区のもの)、正方形のもの5棟、長方形のもの7棟に分類される。これらからは、地床炉が2棟(うち1棟は石囲炉)から検出されたのみで、それらの炉跡も焼土・灰ともに薄く、長期間使用されたものとは考えがたいものとされた。

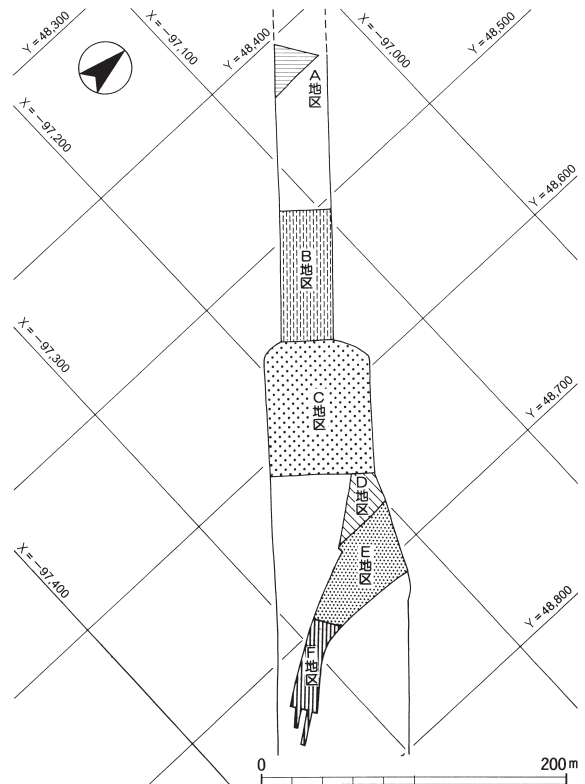
C地区においてもうひとつ特記するものとして、磨製石斧68本(未成品59本、完成品9本)や、敲打具・台石・砥石などの工具類、剥離段階に生じる破碎石片の出土がある。これらの石斧の特徴とし



第4図 宮山遺跡周辺地形図(1:10,000)〔都市計画図1:5,000「大安町」・「北勢町」より〕

ては、未成品はほとんど失敗品であり、完成品も一般的な成品としては変則的なものである点が認められる。このことから、宮山遺跡では石斧の生産を行い、完成品を他所へ出荷し、自らのムラでは失敗品あるいは不良品から最低限度の使用に耐えるものに敢えて刃部を作り使用していた可能性が示唆されている。C地区において石斧製作をする際の集落としての性格については、『他所にある拠点的なムラの出先機関のような存在で季節的あるいは必要に応じた一時的なムラ』、『自給可能な集落の一部として、専門的な技術集団を内包する自立したムラ』、『農閑期を利用した季節的労働として石器製作に取り組んだ半農的なムラ』、『原石の入手、木材資源の存在、段丘下を流れる員弁川から伊勢湾への水運などから、いわゆる「山の民」としての社会的分業を受け持つムラ』などの可能性が考察された。また、棟持柱を持つ掘立柱建物も検出されている。C地区の竪穴住居群は中期後半を境になくなり、集落の移動あるいは廃絶が想定される。

E地区では、方形周溝墓（SX19）と前方後方形周溝墓の可能性のある遺構（SX20）が検出された。時期的には、出土遺物からSX19は廻間Ⅰ新段階、SX20は廻間Ⅱ新段階に相当すると考えられる。付近からは、同時期の住居跡は見つかっておらず、墳墓のみが築かれたことになる。SX19は、1辺9mほどに画された方形周溝墓で、B1型墳<sup>⑰</sup>と呼ばれる周溝の中央に陸橋を持つものである。墳丘中央付近には、ほぼ南北方向に主軸を持つ木棺直葬と思われる墓壙を検出したが、遺存状態が悪く棺の形状等を推定するまでには至らなかった。SX20は、周溝と思われる浅い土坑状の落ち込みが断続して認められ、その形状から、前方後方墳の前方部前面から後方部とのくびれ部にまで至る屈曲に合致することがわかった。さらに、出土遺物が一部赤彩の痕跡を持つ壺型土器の破片のみであったことから、B3型墳<sup>⑱</sup>とされる前方後方形周溝墓の可能性があり、その大きさは、全長30m、前方部長11m程度が推定されている。第1次調査においては、前方部がさらに南に続いて存在することが想定されており、今回の調査においてその形態や規模等の解明が期待されている。（山口聡嗣）



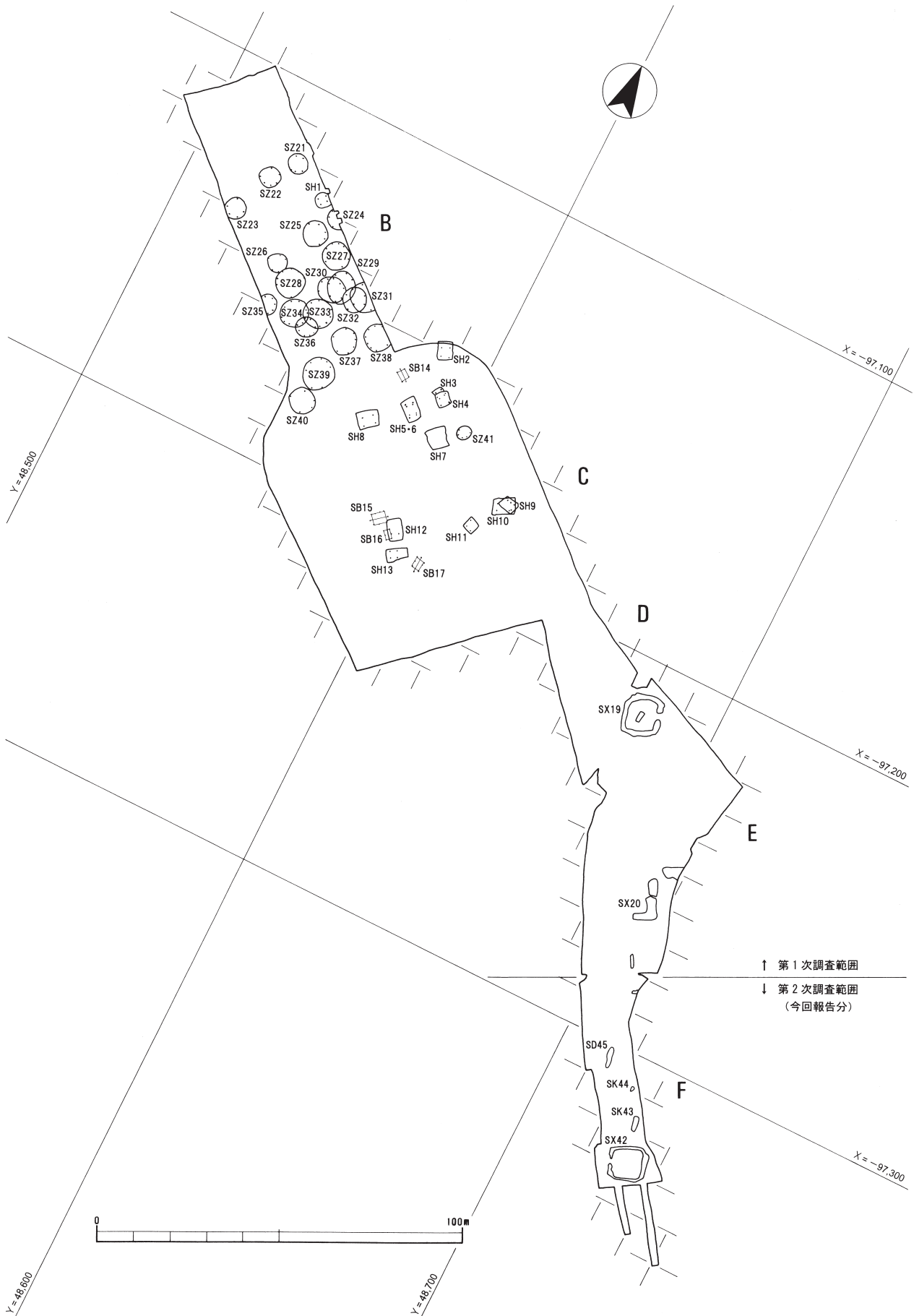
第5図 宮山遺跡調査地区割図（1：5,000）

【参考資料】

- ・吉田史郎他『桑名地域の地質』（地質調査所、1991年）
- ・大安町教育委員会『大安町史』第1巻（1986年）
- ・北勢町史編纂委員会『北勢町史』（2000年）
- ・員弁町史編纂委員会『員弁町史』（1991年）
- ・東員町史編纂委員会『東員町史』上巻（1989年）
- ・四日市市『四日市市史』第二巻（1988年）
- ・四日市市『四日市市史』第三巻（1993年）
- ・近藤義郎編『前方後円墳集成-中部編』（山川出版社、1992年）
- ・三重県教育委員会『三重の中世城館』（1976年）

【註】

- ① 松本覚他『川向遺跡』（北勢町教育委員会、1993年）
- ② 註①に同じ
- ③ 角正芳浩『上惣作遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）
- ④ 清水弘之、杉崎淳子、今尾宏紀『覚正垣内遺跡』『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ』（三重県埋蔵文化財センター、1997年、1999年、2000年）
- ⑤ 清水弘之他『東村城跡』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
- ⑥ 角正芳浩他『権現坂遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）
- ⑦ 蔭山誠一『北野遺跡(第2次)』（員弁町教育委員会、1994年）
- ⑧ 吉澤良他『東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1990年）
- ⑨ 山田猛他『山田遺跡-縄文時代編』（東員町教育委員会、1991年）
- ⑩ 註⑤に同じ
- ⑪ 註①に同じ
- ⑫ 註③に同じ
- ⑬ 小玉道明他『新野遺跡C地区』（三重県教育委員会、1972年）  
小玉道明『西山遺跡・新野遺跡』（東員町教育委員会、1976年）
- ⑭ 小濱学『小牧北遺跡現地説明会資料』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）
- ⑮ 『日本地名大辞典-24三重県』（角川書店、1991年）
- ⑯ 竹内英昭『宮山遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）
- ⑰ 赤塚次郎『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター、1990年）
- ⑱ 註⑰に同じ



第6図 宮山遺跡遺構配置図 (1:15,000)

### Ⅲ 宮山遺跡（第2次）



# 1 層位と遺構

## (A) 層位

今回調査を実施したF地区は宮山遺跡縁辺部の段丘端部に位置し、標高は73m前後である。

基本的層序は、上から、第1層(表土):耕作土、第2層(地山)の順である。地山は場所によって変化し、南から黄褐色砂質土(～10cmの石を多く含む)、褐色粘質土(～7cmの石を含む)、オリーブ褐色砂質土(小石～30cmの石を含む)、褐色砂質土(小石～15cmの石を含む)が観察された。調査区の南北方向の中間付近西半分においては、遺構の深さより深い攪乱があったために地山が確認できなかった。層序からわかるように表土直下地山であり、遺構検出は現地表面から20～40cm下で行った。

## (B) 遺構

F地区は、第1次調査E地区の南に連続して位置し、東側は段丘崖に面している。表土直下が地山であることに併せて、近・現代の攪乱が多く、遺構の残存状態はあまりよいとはいえないが、その中でも比較的良好なものについて以下に記す。

**SX42** 調査区南端部において検出された方形周溝墓である。第1次調査のE地区北端において検出された方形周溝墓(SX19)と同じく、周溝の中央に陸橋を持つ「中央陸橋型」の中でもB1型墳<sup>①</sup>と呼ばれるものである。陸橋中央を基軸とした方位はW18°Sであり、陸橋の開口幅は1.8mある。

方形周溝墓の規模は、外法で東西11m・南北10m、周溝内法で東西・南北ともに8mを数える。周溝の幅は、北(0.8m)と南(0.6m)が細く、東(1.5m)と西(1m)が太くなっており、北辺の両端およびその周囲が攪乱で壊されている。周溝の平面形は、内側は直線的な辺と直角に近い屈曲部を持ち、方形を意識した形状をしているが、外側は不定円形の曲線で、方形を意識していない。このことは周溝の幅にもあらわれており、南辺の両側の屈曲部が一番細く、0.4mしかない。周溝の深さは、東が深く(0.7m)、西が浅い(0.1m)。これは、元の地形において西側が高く東側が低くなっており、後世において西側を重点的に削平して開墾した結果、遺構が壊れてしまったためと考えられる。残りのよい東周溝

の断面形は、内側の方が外側より傾斜が急になっていた。なお、盛り土が削平されたためか、主体部を確認することはできなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物は、弥生土器片が中心であるが、石器も少量出土した。

陸橋部北側周溝から広口壺(1)が細片状態となって出土した。その他も、周溝埋土からではあるが、小片が散在して出土している。

1は、埋土中に浮いた状態で出土し、本来は墳丘上などに据えられていたものが溝に転落して埋まったものと考えられる。この土器は、この地方ではあまり類例をみないものである。

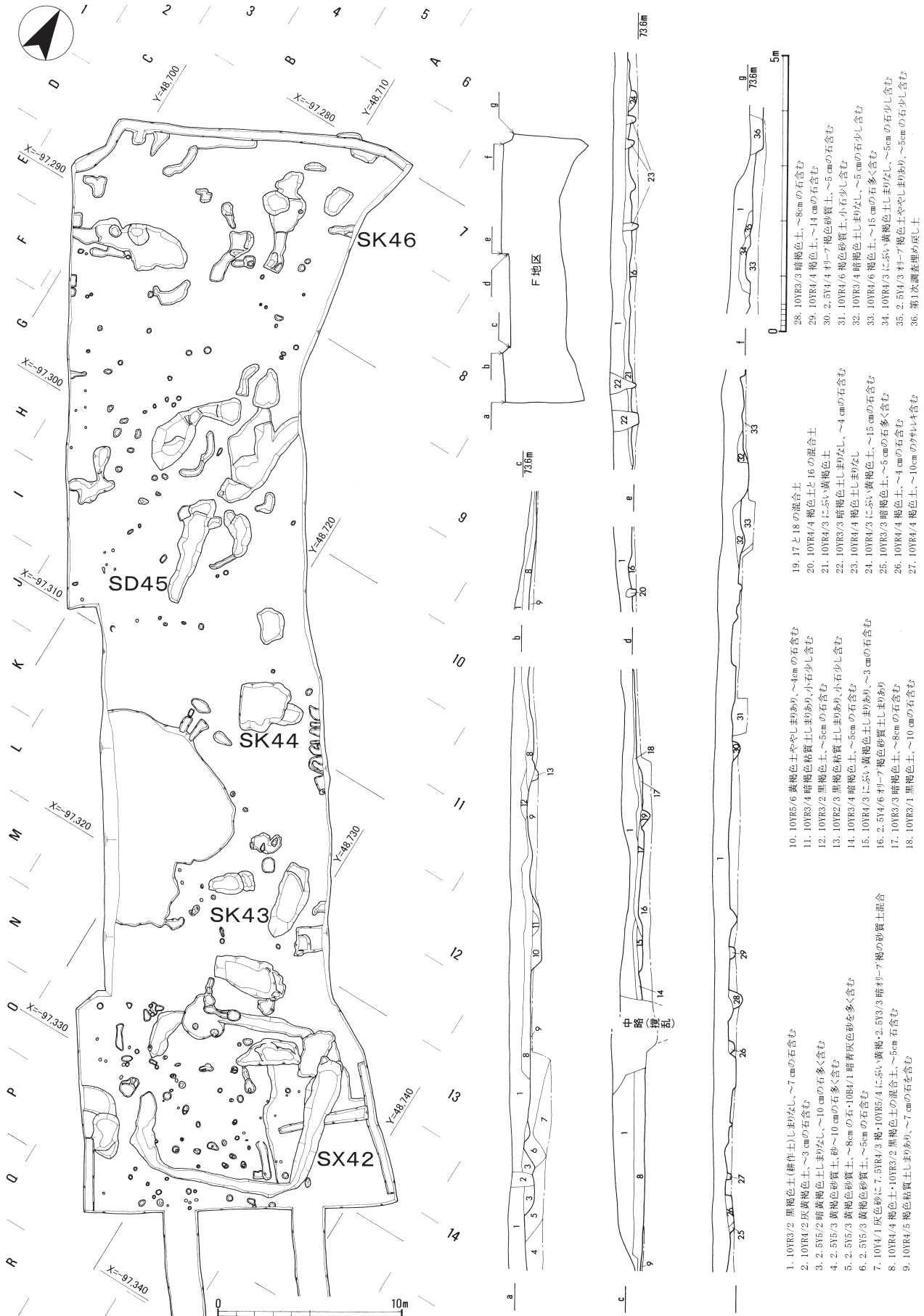
**SK43** SX42の北にある細長い土坑で、長辺の軸をN12°Wとやや北から西偏している。規模は、東西1.7m、南北4.1m、深さ0.5mである。弥生土器片が出土した。

**SK44** 調査区中央付近にある土坑で、西側を攪乱により壊されている。大きさは、南北1.2m、東西1.0m、深さ0.3mで、弥生土器片が出土した。

**SD45** SK44の北西に位置する溝で、長軸方向は、SK43と同じN12°Wである。東西1.35m、南北6.0m、深さ0.5mで、弥生土器片が出土した。墓域内に所在することを勘案すると、SD45は長楕円形の埋葬用土坑である可能性も考えられ、溝としたが墓坑とする必要があるかもしれない。

**SK46** 調査区の北端近くの土坑で、長軸方向は、E26°Nである。東西1.3m、南北0.5m、深さ0.2mで、東側は崖下への土砂等の落下防止のため残した土手に及んでおり、さらに東に続いていると考えられる。遺物は出土していないが、第1次調査においてE地区の南端で想定された前方後方形墳丘墓(SX20)の南に位置し、埋土もSX20周溝埋土に近似している。

**SX42の南側について** 今回の調査では、調査区の南端において方形周溝墓(SX42)が1基確認されている。方形周溝墓の場合、隣接して築かれる例が多くあるため、SX42の周囲に別の方形周溝墓が存在する可能性が考えられた。そのため、今までの範囲確認調査において、試掘があまり十分に



第7図 F地区遺構図 (1:300、土層断面図は1:100)



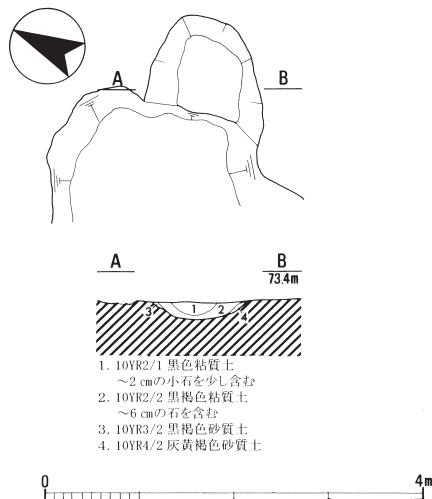
第8図 SX42実測図(1:80、土層ベルト断面図は1:40)

行われなかったSX42南側の区域へ、方形周溝墓等の遺構の有無を確認するために、2本のトレンチ(1.8m×13m・1.8m×23m)を設定した。しかし、平面的にも土層断面においても遺構は確認されず、墓域範囲はSX42で終息していると考えられる。

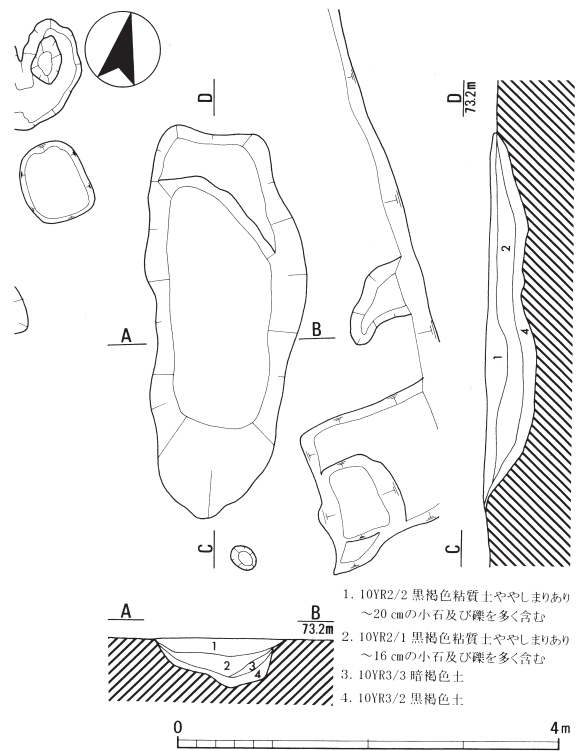
(山口聡嗣)



第9図 SX42周溝北西部土器出土状況図(1:40)

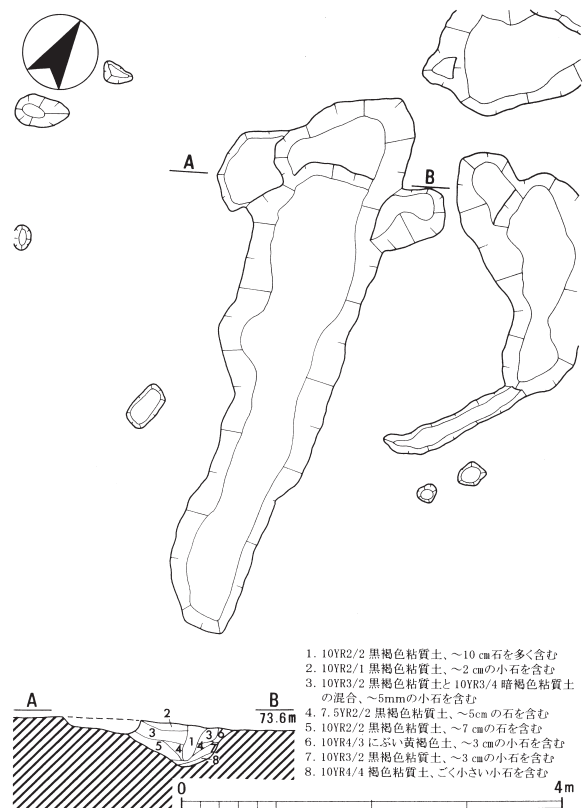


第11図 SK44実測図(1:80)



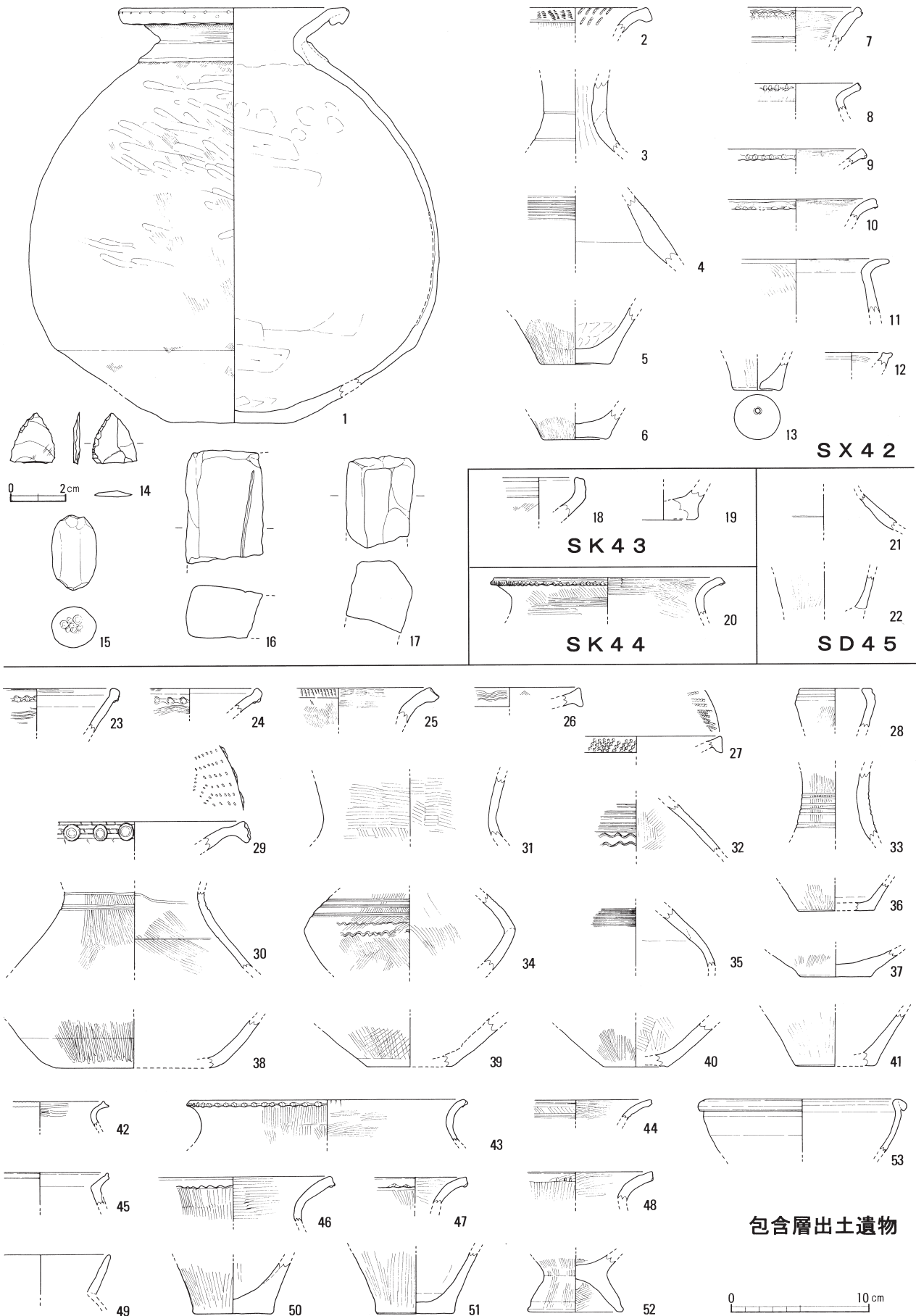
第10図 SK43実測図(1:80)

1. 10YR2/2 黒褐色粘質土ややしまりあり  
~20 cmの小石及び礫を多く含む
2. 10YR2/1 黒褐色粘質土ややしまりあり  
~16 cmの小石及び礫を多く含む
3. 10YR3/3 暗褐色土
4. 10YR3/2 黒褐色土



第12図 SD45実測図(1:80)

1. 10YR2/2 黒褐色粘質土、~10 cm石を多く含む
2. 10YR2/1 黒褐色粘質土、~2 cmの小石を含む
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土と10YR3/4 暗褐色粘質土の混合、~5mmの小石を含む
4. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土、~5cmの石を含む
5. 10YR2/2 黒褐色粘質土、~7 cmの石を含む
6. 10YR4/3 に近い黄褐色土、~3 cmの小石を含む
7. 10YR3/2 黒褐色粘質土、~3 cmの小石を含む
8. 10YR4/4 褐色粘質土、ごく小さい小石を含む



第13図 出土遺物実測図 (1 : 4、14のみ1 : 2)

## 2 遺物

F地区出土の遺物は、コンテナバットで10箱である。遺構出土の遺物は全体の1割程度である。

### S X 4 2 出土遺物 (1~17)

壺(1~6)や甕(7~13)と、石鏃(14)や敲石(15)・有溝砥石(16)・砥石(17)がある。これらのうち、確実に本遺構に伴っていたと考えられる遺物は1のみである。他は細片であり、埋没の過程で混入したものが多数含まれると考えられる。

1は、この地方ではあまり類例をみない折返口縁の広口壺である。頸部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外面に折り返して肥厚させる。口縁内面に上端面をもつが、文様の有無は確認できなかった。また、頸部直下外面に素文の低くて幅広の突帯を貼り付け、強くヨコナデを施している。体部はやや下膨れ気味の様相を呈し、ハケの後に荒いミガキを施すとともに体部内面にヘラケズリをすることにより、体部はかなり薄い仕上がりとなっている。平底で、穿孔はない。

2は広口壺の口縁部、3は細頸壺の頸部、4は広口壺の体部である。3は明らかに古く、弥生中期のものである。5・6は底部であるが、甕の可能性もある。

7~12は、甕の口縁部であり、くの字口縁のものと考えられる。13は甕の底部であり、底部穿孔が観察された。

石器は少量出土したのみである。14は石鏃の未成品である。15は敲石で、敲打痕が認められた。16は側面が2面欠損しているが、その形態と1条の細い溝が観察されたことから、有溝砥石と考えられる。17は側面が1面欠損しているが、磨面の存在から砥石と考えられる。

### S K 4 3 出土遺物 (18・19)

高坏(18)と壺(19)がある。18は口縁外面に凹線文が2条あり、弥生時代中期後葉から後期前葉のものと考えられる。19は壺底部であるが、磨滅が激しく詳細は不明である。

### S K 4 4 出土遺物 (20)

甕(20)である。くの字状口縁の甕口縁部で、口縁部外面にキザミをつけた後ヨコハケを施し、弥生時代のものと考えられる。

### S D 4 5 出土遺物 (21・22)

壺(21)・甕(22)がある。21は、壺肩部で外面に沈線が1条存在する。22は、甕底部である。

### 包含層出土遺物 (23~53)

壺(23~41)・甕(42~52)・片口鉢(53)がある。

23~27・29は広口壺で、口縁外面に刻みがあるもの(23・24)と列点文があるもの(25)、波状文があるもの(26)、口縁内外面両方に列点文があるもの(27)、口縁外面に凹線文を施した後円形浮文を貼り付け、口縁内面に羽状刺突文を施すもの(29)がある。28・33は、細頸壺である。28は外面に凹線文を施した口縁部である。33は、外面に沈線を上部に5条・下部に2条施した頸部をもつ。31は頸部、30・32・35は肩部、34は体部、36~41は底部である。

42~49は、くの字状口縁を持つ甕口縁部である。50~52は甕底部である。50・51は平底のものであるのに対し、52は高台を持つ台付甕の底部である。

53は、近世以降の信楽の片口鉢である。<sup>②</sup>

なお、小片のため図示しなかったが、その他に美濃の徳利や信楽の土瓶、瀬戸のすり鉢等、近世以降の遺物も出土している。<sup>③</sup> (山口聡嗣)

番号	実測番号	出土遺物		出土位置	出土遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
		器種	器形			口径	器高	底径					
1	001-01	弥生土器	壺	N9-09	SX42	16.4	30.2	8.8	口縁:外へ折返し、頸部:外面粘土帯貼り付け後強い横ナデ、内面ナデ(一部指オサエ)、体部:外面不定方向ハケ後ミガキ、内面ヘラケズリ。	やや粗 ~5mmの大砂粒を含む	外:浅黄 2.5Y7/4 内:黄灰 2.5Y4/1	口縁部 4/12 底部 3/12	折返口縁壺(遠江系)、折り返した口縁端部外面に刺突。
2	002-11	弥生土器	壺	P11	SX42	-	-	-	外面:タテハケ(5本/cm)。	やや粗 ~4mmの石を少量含む	橙 7.5YR7/6	(口縁部のみ 3cm 残存)	口縁部内面へ刺突、外面に糜状文。
3	002-10	弥生土器	壺	09	SX42	-	-	頸部 4.8	外面:まめつ多く調整不鮮明。内面:しぼり痕跡。	やや粗 ~2mmの石を少量含む	橙 7.5YR7.6	頸部~肩部 4/12	外面沈線2条
4	002-09	弥生土器	壺	012	SX42	-	-	-	内外面ともまめつ多く調整不鮮明。	粗 ~2mmの石を多く含む	浅黄橙 10YR8/4	(肩部のみ 6.3cm 残存)	外面直線文
5	002-01	弥生土器	壺	P11	SX42	-	-	4.9	外面:タテハケ(5本/cm)、内面及び底面はまめつのため調整不明。底部から外面にかけてスズ痕あり。	やや密 ~2mmの石を少量含む	浅黄橙 10YR8/4	底部完存	
6	002-02	弥生土器	壺	012	SX42	-	-	4.7	外面:タテハケ(10本/cm)、内面及び底面はまめつのため調整不明。	やや密 ~2mmの石を少量含む	浅黄 2.5YR7/4	底部 3/12	
7	002-06	弥生土器	甕	012	SX42	-	-	-	外面:上部タテハケ(7本/cm) 内面:不定方向のヨコハケ(7本/cm)。	やや密 ~1mmの石を少量含む	にぶい黄橙 10YR7/4	(口縁部のみ 3.5cm 残存)	口縁部外面に刺突、外面下部沈線2条

第1表 宮山遺跡(F地区)出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	出土遺物		出土位置	出土遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
		器種	器形			口径	器高	底径					
8	002-08	弥生土器	甕	N10	SX42	—	—	—	外面:タテハケ(4本/cm)、内面:まめつのため調整不明。	やや粗 ~1mmの石を少量含む	浅黄橙 10YR8/4	(口縁のみ 3cm 残存)	口縁部外面キザミ
9	002-05	弥生土器	甕	N11	SX42	—	—	—	外面:タテハケ(4本/cm)、内面:ヨコハケ(6本/cm)。	やや密	橙 7.5YR7/6	(口縁のみ 4.5cm 残存)	口縁部外面キザミ
10	002-04	弥生土器	甕	P10	SX42	—	—	—	口縁部:外面タテハケ(11本/cm)、内面:ヨコハケ(7本/cm)、外面:まめつのため調整不明。	やや粗 ~1mmの石を少量含む	橙 7.5YR7/6	(口縁のみ 5cm 残存)	口縁部外面キザミ
11	002-03	弥生土器	甕	O12	SX42	—	—	—	外面:タテハケ(4本/cm)、内面:ヨコハケ痕跡(まめつのため不明瞭)。	密	灰 5Y4/1	(口縁のみ 6.5cm 残存)	
12	002-07	弥生土器	甕	N11	SX42	—	—	—	口縁部:外面ナデ、口縁及び外面まめつ多し、内面:ヨコハケ(7本/cm)。	やや粗 ~1mmの石を少量含む	橙 7.5YR7/6	(口縁のみ 1.5cm 残存)	
13	005-05	弥生土器	甕	N11-12	SX42	—	—	3.2	外面:ハケ痕跡、内面及び底面まめつのため調整不明。	やや粗 ~1mmの砂粒を多く含む	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 2/12	底部穿孔あり
14	003-04	石鏡	—	N11	SX42	長さ 1.8	幅 1.6	厚さ 0.3	—	—	—	先端部のみ 残存	未成品
15	003-03	敲石	—	N9	SX42	長さ 6.5	太さ 3.2	—	—	—	—	—	敲打痕あり
16	003-01	有溝砥石	—	P10	SX42	長さ 8.0	幅 5.6	厚さ 3.9	—	—	—	—	—
17	003-02	砥石	—	P10	SX42	長さ 6.5	幅 5.0	厚さ 5.2	—	—	—	—	—
18	004-04	弥生土器	高坏	L10	SK43	—	—	—	口縁部:ナデ、外面:タテハケ(7本/cm)。	やや粗、~1mmの石を多く含む、クサリキを含む	橙 7.5YR7/6	(口縁部のみ 2cm 残存)	口縁外面に凹線 2条
19	004-05	弥生土器	壺	L10	SK43	—	—	—	まめつのため調整不明。	やや粗 ~3mmの石を少量含む	明赤褐 5YR5/6	(底部のみ 2.5cm 残存)	
20	004-06	弥生土器	甕	J8	SK44	16.4	—	—	口縁部:ヨコハケ(8本/cm)、外面:タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(8本/cm)、内面:不定方向ヨコハケ(5本/cm)。	やや粗、~2mmの石を多く含む、クサリキを含む	橙 7.5YR7/6	口縁部 2/12	口縁部キザミ後ヨコハケ(9本/cm)。
21	004-02	弥生土器	壺	I6	SD45	—	—	—	内外面ともまめつのため調整不明。	粗 ~2mmの石を多く含む	にぶい黄橙 10YR7/4	(肩部のみ 4cm 残存)	外面:沈線 1条
22	004-01	弥生土器	甕	I6	SD45	—	—	6.1	外面:タテハケ(6本/cm)、内面:まめつのため調整不明。	やや粗 ~1mmの石を多く含む	淡黄 2.5Y8/3	底部 1/12	
23	007-04	弥生土器	壺	I11	包含層	—	—	—	口縁部:ヨコハケ、外面:ヨコハケ、内面:ヨコナデ。	やや密 0.5mmの砂粒を含む	にぶい褐 7.5YR5/4	小片	口縁部外面キザミ
24	007-03	弥生土器	壺	I10	包含層	—	—	—	口縁部:外面上部ヨコハケ痕跡、口縁内面~内面:ヨコナデ。	やや密	にぶい褐 7.5YR6/4	小片	口縁部下部キザミ
25	008-07	弥生土器	壺	N9	包含層	—	—	—	外面:タテハケ、内面:ヨコハケ。	やや密 ~2mmの砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	口縁部外面刺突文
26	007-02	弥生土器	壺	P10	包含層	—	—	—	口縁部:内面ナメハケ、外面ナデ。	やや粗 ~1mmの砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR6/4	小片	口縁部外面波状文
27	008-08	弥生土器	壺	N10	包含層	—	—	—	ナデ	密 ~0.5mmの砂粒を含む	橙 7.5YR7/4	小片	口縁部内面及び外面に列点文
28	008-03	弥生土器	壺	N10	包含層	5.2	—	—	口縁部:上面~内面ヨコナデ、外面:タテハケ、内面:ヨコナデ。	やや密 ~1mmの砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/10	口縁部外面凹線文
29	007-01	弥生土器	壺	O10	包含層	—	—	—	外面:ヨコナデ	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	口縁部外面凹線文+円形浮文、内面羽状列点文
30	004-03	弥生土器	壺	O10	包含層	—	—	頸部 10.2	外面:タテハケ(7本/cm)、内面:ナメハケ(7本/cm)。	やや粗~1mmの小石微量含む、クサリキを含む	浅黄橙 10YR8/4	頸部~肩部 1/12	外面凹線文(1条+2条) 内面凹線文(1条+1条)
31	005-04	弥生土器	壺	D11	包含層	—	—	頸部 12.4	外面:タテハケ後、ヨコハケ(5本/cm)、内面:ヨコハケ(5本/cm)。	やや密 ~1mmの砂粒少量含む	淡黄 2.5Y8/4	小片	
32	005-03	弥生土器	壺	P10	包含層	—	—	—	外面:ナデもしくはミガキ、内面:タテハケ後ナメハケ	密、クサリキを含む	橙 7.5YR7/6	小片	外面 2本以上重ねた脚状具による直線文、波状文
33	005-08	弥生土器	壺	P10	包含層	—	—	—	外面:タテハケ(6本/cm)、内面:まめつのため、調整不明	やや粗、~1mmの砂粒を多く含む、クサリキを含む	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	外面沈線(5条+2条)
34	008-02	弥生土器	壺	O11	包含層	—	—	体部 15.4	外面:上部~屈曲部タテハケ、内面:タテハケ	やや密 ~1mmの砂粒を含む	外:にぶい黄橙 10YR7/3 内:灰黄 2.5Y6/2	体部 1/8	外面上部沈線 2条×3 +屈曲部波状文
35	005-06	弥生土器	壺	O10	包含層	—	—	—	外面下部:ナデ、内面:ナデ	粗 ~2mmの砂粒を多く含む	浅黄 2.5Y7/3	小片	外面上部直線文 13条
36	006-02	弥生土器	壺	N11-12	包含層	—	—	5.4	外面:タテハケ、底面:ナデ、内面:ヨコナデ	やや密 ~2mmの砂粒を含む	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:暗灰黄 2.5Y4/2	底部 1/6	
37	006-08	弥生土器	壺	O11	包含層	—	—	5.2	外面:タテハケ、底面:ナデ、内面:まめつのため調整不明	やや密 ~1mmの砂粒を含む	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:浅黄 2.5Y7/3	底部 1/4	
38	006-06	弥生土器	壺	P10	包含層	—	—	10.8	外面:ミガキ、底面:ナデ、内面:風化のため調整不明	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	橙 7.5YR7/6	底部 1/6	
39	006-05	弥生土器	壺	N9	包含層	—	—	6.2	外面:上部タテハケ後ナメハケ、下部ヨコナデ、内面:剥離のため調整不明	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR7/4	底部 1/4	
40	006-09	弥生土器	壺		包含層	—	—	4.6	外面:タテハケ、底面:ナデ、内面:不定方向ハケ。	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	外:橙 7.5YR7/6 内:浅黄 2.5Y7/3	底部 1/10	
41	006-04	弥生土器	壺	O11	包含層	—	—	5.6	外面:タテハケ、底面:ナデ、内面:風化のため調整不明。	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	暗灰黄 2.5Y4/2	底部 1/6	
42	007-05	弥生土器	甕	O10	包含層	—	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコハケ。	やや粗 ~1mmの砂粒を含む	にぶい黄褐 10YR5/3	小片	口縁部外面キザミ
43	008-01	弥生土器	甕	N10	包含層	20	—	—	外面:タテハケ、内面:ヨコハケ。	やや密 ~1mmの砂粒を含む	にぶい黄褐 10YR7/4	口縁部 1/10	口縁部外面キザミ
44	008-06	弥生土器	甕	N10	包含層	—	—	—	外面:タテハケ、内面:ヨコハケ。	やや粗 ~2mmの砂粒を含む	外:橙 7.5YR7/6 内:にぶい橙 7.5YR7/4	小片	口縁部外面キザミ 外面沈線 2条
45	007-06	弥生土器	甕	P10	包含層	—	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ。	やや密 ~1mmの砂粒を含む	橙 7.5YR6/6	小片	口縁部外面凹線文
46	008-04	弥生土器	甕	P10	包含層	—	—	—	外面:タテハケ、内面:ヨコハケ。	やや粗 ~2mmの砂粒を含む	外:黄橙 10YR8/6 内:橙 5YR7/6	小片	口縁部外面キザミ
47	005-01	弥生土器	甕	P10	包含層	—	—	—	口縁:ナデ、外面:タテハケ(5本/cm)後、ナデ、内面:ヨコハケ。	やや粗 ~1mmの砂粒を含む	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	口縁部外面キザミ
48	005-02	弥生土器	甕	P10	包含層	—	—	—	外面:タテハケ(4本/cm)、内面:ヨコハケ。	粗、~1mmの砂粒多く含む	明赤褐 2.5YR5/8	小片	口縁部外面キザミ
49	008-05	弥生土器	甕	D4	包含層	—	—	—	ナデ	やや粗 ~1mmの砂粒を含む	灰黄 2.5YR5/8	小片	
50	006-01	弥生土器	甕	O10	包含層	—	—	5.6	外面:タテハケ、底面:オサエ、内面:タテハケ。	やや密 ~0.5mmの砂粒を含む	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:黒 N2/0	底部 1/3	
51	006-03	弥生土器	甕	O10	包含層	—	—	5.4	外面:タテハケ、底面:ナデ、内面:側部タテハケ、底部ナデ。	やや密 ~1mmの砂粒を含む	外:にぶい黄橙 10YR5/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	底部 1/4	
52	006-07	弥生土器	甕	O10	包含層	—	—	6.6	外面:タテハケ、内面:ヨコハケ。	やや密 ~1mmの砂粒を含む	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR6/3	底部 1/8	台部分
53	005-07	信楽	片口鉢	P9	包含層	13.6	—	—	口ヨコナデ	密	浅黄 5Y7/4	口縁部 4/12	口縁部外へ折り返し肥厚化、底成長。

第2表 宮山遺跡(F地区)出土遺物観察表(2)

### 3 結 語

今回調査のF地区は遺跡縁辺部にあり、崖縁の崩落による遺跡範囲の縮小や広範囲にわたる攪乱のため、遺構の残存状況はよくなかったが、以下にその中でも注目するものについて記述し、考察を行う。

#### (A) SX42について

方形周溝墓SX42は、「中央陸橋型(一辺中央に陸橋部を持つもの)」<sup>④</sup>の中でもB1型と分類されたもので、第1次調査において検出されたSX19と同類である。なお、陸橋部のある方向は、SX19が東側にあるのに対してSX42は西側にあり、ほとんど逆方向に開口部をもつ。これら2つの方形周溝墓は100m以上離れている。

出土遺物は、弥生時代中期に属するものも存在するが、まったくの小破片であり、それらは埋没の過程において混入したものと思われる。そのような中、陸橋部脇の周溝からは折返口縁の広口壺(1)が出土した。一般的に折返口縁の広口壺は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、東海地方東部から関東地方に広く分布するものである。しかし1は、折り返した下部を不定形のままですます雑な仕上げや肩部への突帯の貼付(補強のため)、体部最上部のみのハケ残存(体部全体にタテハケを入れた後、体部下部にヨコミガキを施すためにできたもの)などの特徴がある。一方、屈曲気味の口縁部が大きく開いており、古墳時代初頭の特徴を示している。このような器形は、天竜川以西の東海地方西部のものに類似するが、折返口縁でもある。したがってこの土器は、天竜川以西の遠江、すなわち西遠江地方のものにより近似していよう<sup>⑤</sup>。これらのことから、この折返口縁壺(1)は、次のような2つの可能性が考えられる。

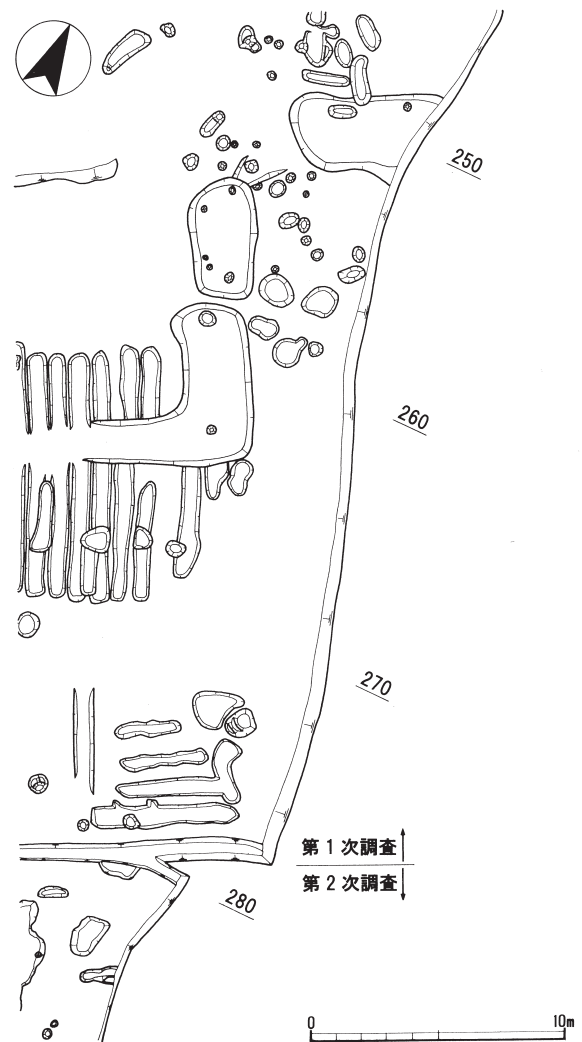
- ① 西遠江のものが搬入された
- ② 西遠江の影響のもとに伊勢で製作された

しかし、いずれにしてもこのことは当地と西遠江地方との交流を示すものであろう<sup>⑥</sup>。

#### (B) SX20について

第1次調査においては、赤塚分類によるB3型<sup>⑦</sup>とされる前方後方形周溝墓SX20が想定されていた。そこで、今回の調査においてその確認を行った結果、

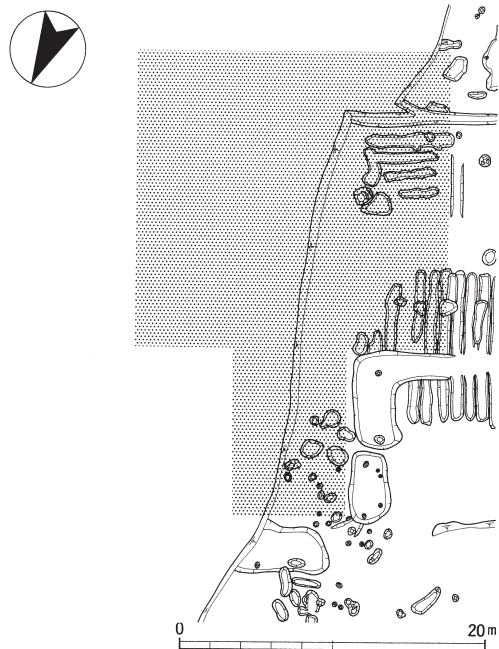
埋土の色が第1次調査SX20に近い土坑SK46が検出された。しかし、後世の削平もあって極めて細いものであり、出土遺物もなかった。ただ、SK46は、SX20の周溝の方向性とほぼ同一の向きを持ち、SX20のSK46に近い周溝部分が削平を受けてわずかな残りしかなかったことから、SX20の周溝の一部である可能性は一応残されているといえよう(第15図)。ただし、第1次調査の遺構カードの記録によるとSX20の周溝はもう少し外側に広がりが見られ、そのプランを少し大きいものとして想定することも可能である(第16図)。このような仮定と推定が成立する場合は、方向性こそ違いますが、宮山遺跡と員弁川を隔てた対岸台地上に所在する麻績塚1号墳(第17図)とほぼ重なる規模の



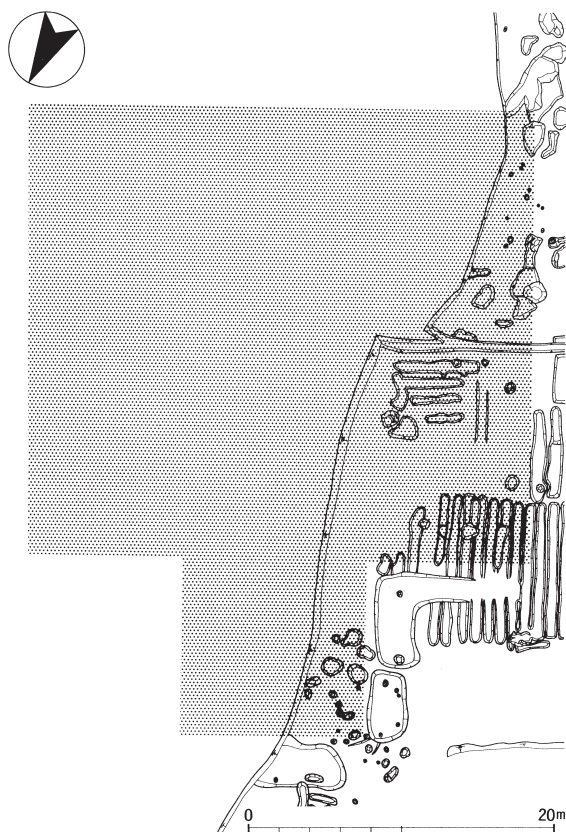
第14図 SX20実測図(1:300)



ものとなる。麻績塚1号墳は、時期的には古墳時代初頭の築造とされ、北勢地方としてはまれな前方後方型形状という共通点と築造時期の近接は、築造した勢力間の何らかの関係を考える材料となるのではないだろうか。



第15図 SX 20 考察図① (1 : 500)

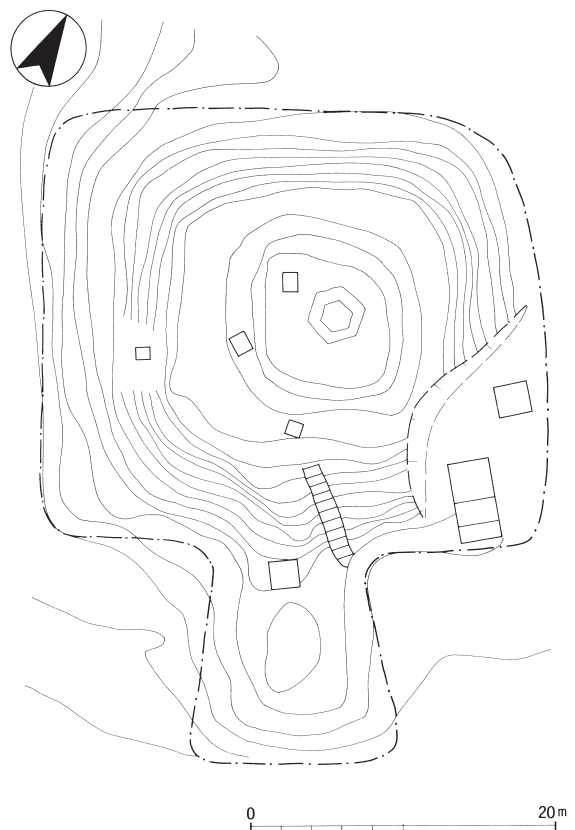


第16図 SX 20 考察図② (1 : 500)

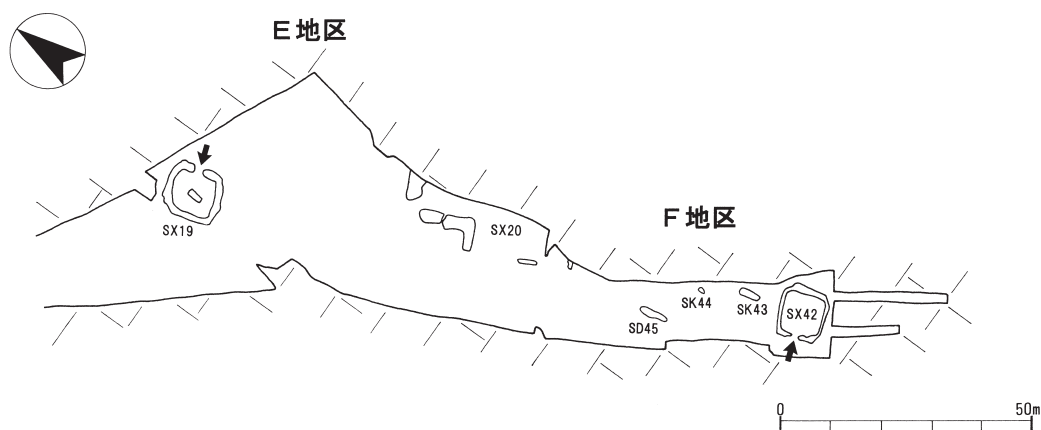
### (C) まとめ

宮山遺跡はB地区からC地区にかけて、まずB地区を中心に縄文時代晩期の集落跡と土器棺墓がみられ、次にC地区を中心に弥生時代中期中葉から後葉の集落跡がみられる。弥生時代には石斧製作の想定される遺物が多数みられており、石器製作集落の存在をうかがわせる。しかし、集落を想定させるものはこの時期をもって断絶し、第1次調査のE地区から今回調査のF地区にかけて、弥生時代後期末から古墳時代初頭における墓域となる。

この付近を概観すると、B1型の方形周溝墓2基が存在し、その2つの方形周溝墓のほぼ中央には、B3型の方前型周溝墓が想定されている。ただし、遺跡の東側の崖は土取りのため破壊されており、SX 20の正確な遺構の形状は確定できなかった。出土遺物から判断して、SX 19が廻間I新段階、SX 20が廻間II新段階に相当すると考えられている<sup>⑩</sup>。また、今回出土の1は廻間I段階に相当するとされている<sup>⑪</sup>。以上から、この3基の墳墓の築造時期は、SX 19とSX 42がほぼ同時期に築かれ、その後わずかな期間を置いてSX 20が築かれたと考



第17図 麻績塚1号墳測量図<sup>⑨</sup> (1 : 500)



第18図 E, F地区遺構配置図 (1:1,500)

えられる。

なお、築造と同時期の集落はまだ周辺から確認されておらず、墓道を推定することはむずかしい。また、E・F地区の東側は現状では段丘崖となり急激に沖積平野に落ち込んでいるが、聞き取りによると、土取りのために「馬肩<sup>うまかど</sup>」という崖縁が長年にわたって後退してきたという<sup>⑬</sup>。このことは、かつて存在したSX20の東半分の崩落を想定することをさまたげない。

以上により、E地区からF地区は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての墓域としての性格を持つものといえよう。そのような中で、SX19とSX42は陸橋の開口部分の向きがちょうど180°逆になっており、その配置と方向性は何らかの計画性を示唆する材料とも考えられる。

また、この時期に伊勢湾西岸において墓域として存在する例（雲出嶋拔遺跡・瀬干遺跡・草山遺跡・野垣内遺跡・中楽山遺跡など）をみると、一般的には方形周溝墓が密集して存在する様相を呈する。そのような同時期の一般例に比較すると、宮山遺跡においては明らかに方形周溝墓（及び、あるいは前方後方型周溝墓）が散在して存在している。その周辺に存在するSK43・SK44は、土坑墓等の可能性もあるが、積極的に肯定するには材料に乏しい。E～F地区の近辺について検証すると、東側は段丘崖となっており崩落した部分を考えても墓域が連続する可能性は少ない。また西側については、路線内の範囲確認調査の結果から墓域は西側には広がらないと考えられる。したがってE～F地区には、密集

性の低い3群が存在したと推定できる。こうした様相から考察すると、当地域においては、計画的な埋葬をはじめたが、造墓集団が急な理由から移転を余儀なくされたか、減ってしまったため、埋葬を放棄して墓域形成が中止されたのではないだろうか。

発掘調査の結果から考えると、墓域の形成された弥生時代後期末から古墳時代初頭の生活跡は検出されなかった。また、本調査に先立って行われた範囲確認調査からもこの周辺には同時期の生活遺構を想定させるような遺構は検出されていない。これらのことを考慮すると、別の場所に居住していた集団が、宮山の地を墓域とした可能性が大きかろう。とはいえ、今回調査が行われた範囲は東海環状自動車道路線内の限られた範囲であり、密集した集落や墓域等が近隣に存在する可能性は残っている。今後の調査にその解明を期待したい。（山口聡嗣）

【註】

- ① 赤塚次郎『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター、1990年）
- ② 瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏のご教示による。
- ③ 註②に同じ
- ④ 註①に同じ
- ⑤ 鈴木敏則「遠江・駿河(後期)」(『YAY!』弥生土器を語る会、1996年)  
中嶋郁夫「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」(『転機』2号、1988年)
- ⑥ 西遠江および東遠江の土器に関しては、袋井市教育委員会の松井一明氏にご教示をたまわった。
- ⑦ 註①に同じ
- ⑧ 伊勢野久好「第2部第14章 伊勢」(『前方後円墳集成中部編』山川出版社、1992年)
- ⑨ 註⑧から再トレースした。
- ⑩ 註①に同じ
- ⑪ 竹内英昭『宮山遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)
- ⑫ 註⑥に同じ
- ⑬ 片岡博「大久保城跡」(『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、1997年)



## IV 大久保城跡

# 1 層位と遺構

調査区の基本層序は、3層に分かれる。このうち、第1層が現状の山林表土の腐葉土層で、第2層が腐植質軽土層（戦中までの耕作土）である。第3層がオリーブ褐色の地山で、今回の調査の検出面である。

調査区に切り込むV字形谷の埋土は単一のものであり、埋没過程をうかがわせるような層序は観察できなかった。この部分の段丘崖土層観察によると、どの層も砂礫を主体とした浸透性の高い土質である。土層の分化は可能であるがいずれも類似した土質で、検出層下に粘土層やシルト層は存在しなかった。

調査地内のV字溝部分に2本の観察トレンチA・Bを設定したが、中世城館に関わるとみられる遺物等は発見できなかった。

戦前からの当地の変遷に詳しい里人から得た情報によれば、V字溝は段丘下への交通のために片樋の人によってつくられた道の跡で、大雨の度に土砂が流れ込んだところの修復を重ねて使用していたものであった。その廃絶後には、周囲の土を重機で押し一度に埋め立てたそうである。このことを裏付けるようにV字溝からは、近現代の投棄物が出土し、攪乱溝であることが判明した。

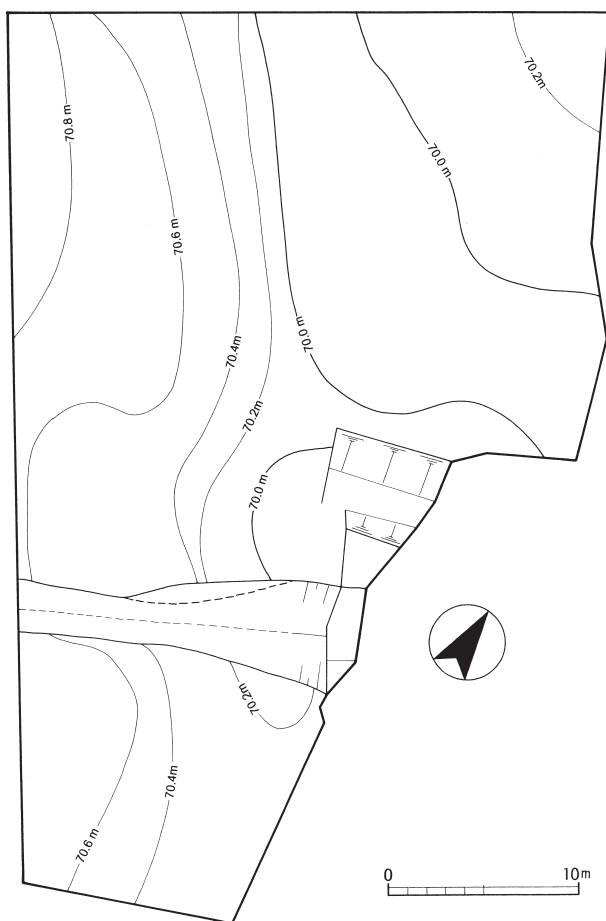
その他の部分についても、今回の調査によって確認できた堀込み等はすべて近代以降の攪乱によるもので、遺構は確認することができなかった。

（片岡 博、山口聡嗣）

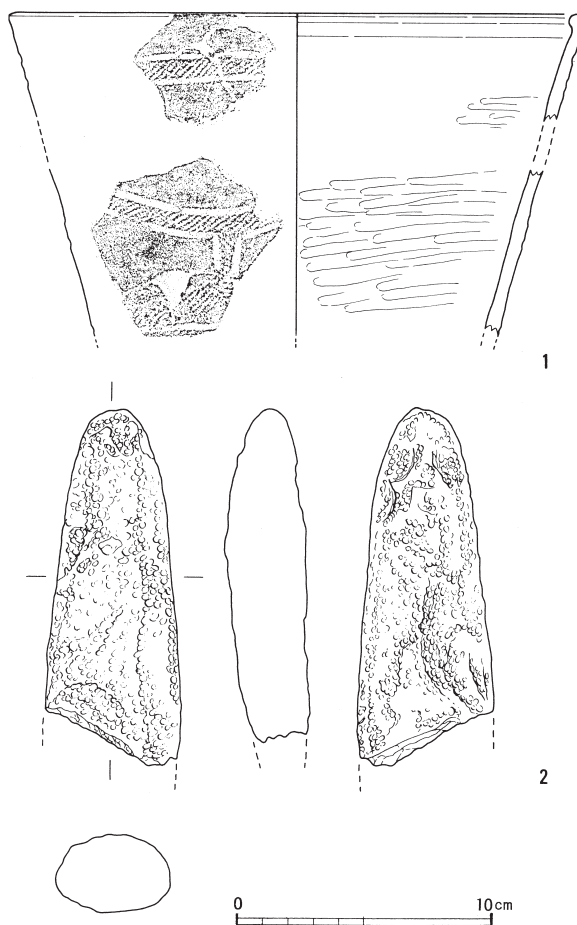
# 2 遺物

出土した遺物は、近代から現代にかけての投棄と思われる陶磁器片がほとんどである。報告対象とな

りうる遺物は2点のみであり、いずれも包含層遺物である。以下に、この2点について記述する。



第19図 調査区実測図（1：400）



第20図 出土遺物実測図（1：3）

1は、いわゆるバケツ型深鉢が想定され、外面に磨消縄文が施文される胎土緻密な薄手の精製土器である。その色調は明赤灰色を呈する。磨消縄文の施文の特徴から縄文時代後期の堀之内2式に並行するものと考えられる<sup>①</sup>。2の石製品は、刃部を欠損しているが、乳棒状の片刃磨製石斧である。材質はハイ

アロクラスタイトと称される火成岩で、調査区北方の宮山遺跡の北で員弁川に合流する青川に特徴的に分布する石器製作に適したものである。このことから、2は宮山遺跡で多数発見された石斧との関連が考えられる。(片岡 博、山口聡嗣)

### 3 結 語

大久保城は、『桑名志』<sup>②</sup>の記述をもとにその所在が字大久保に推定されていたが、『三重の中世城館』<sup>③</sup>の段階では詳細不明とされている。今回の調査において当地における城の存在に関する手がかりが期待されたが、中世城館にかかわる遺構はもとより、どの時代の遺構も確認することができなかった。遺物も、縄文土器と弥生時代の石斧のほかは、近代から現代の投棄物がみられたのみで、山茶碗等の中世の遺物は出土しなかった。近接する宮山遺跡においても山茶碗や山皿等の出土は非常に少ない。唯一、調査区中央部の近代における道として利用されていたV字形の溝が堀の可能性を残していたが、地元に残る伝承や溝の埋土の状況、さらに溝から中世遺物の出土が見られないことから、堀ではなくて攪乱溝と判断することが適切と考えられた。

員弁川の氾濫原を見下ろす段丘縁辺に中世城館が存在したとする推定は、対岸の金井城の例からも妥当性を欠くものではない。しかし、今回の調査においては中世城館を裏付けるものは確認することができず、『桑名志』の記述の妥当性も含め、大久保城跡の所在地等の確認は今後の課題である。

今回の調査区と宮山遺跡とは位置的にほぼ連続した場所にあり、ともに員弁川右岸の河岸段丘上に立地している。しかし、調査の結果からは、宮山遺跡は縄文時代後期から古墳時代にかけて断続的に営まれた遺跡であることが判明したのに対し、大久保城跡の調査範囲からは、遺跡の性格を決定づける遺構は検出されていない。

大久保城跡からの出土土器は縄文時代後期後葉の磨消縄文のものである。これは、宮山遺跡D地区においてまとめて出土した一連のもの(中津式土器)と比べると、時代が下る堀之内2式並行のものと考えられる。ただ、宮山遺跡においては若干の縄文時代後期後葉の土器も出土しているほか、縄文時代晩期の土器がまとめて出土しているところもある。このことから、縄文時代の宮山遺跡は後期から晩期にかけて営まれたと考えられ、大久保城跡出土の縄文土器もまた、その時期内に含まれると考えてよいだろう。石斧はハイアロクラスタイト製のものである。これは、石器生産のムラとして想定されている宮山遺跡(C地区)において原材料として使用されているものと同じである。その形状も宮山遺跡において『伐裁斧Ⅱ』<sup>④</sup>と規定されたものの成品と類似している。

今回の調査からわかったことを総合して考察すると、現在の時点では、大久保城跡と想定された区域は遺跡の縁辺部として宮山遺跡に含まれる範囲であり、当時の人が生活した場ではないが、何らかの活動範囲には相当していた区域ではないだろうか。

(片岡 博、山口聡嗣)

#### [註]

- ① 斎宮歴史博物館小濱学氏のご教示による。
- ② 片山恒斎『桑名志』(1835年)
- ③ 三重県教育委員会『三重の中世城館』(1976年)
- ④ 竹内英昭『宮山遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)





宮山遺跡F地区遠景（南から）



宮山遺跡F地区全景（上から）

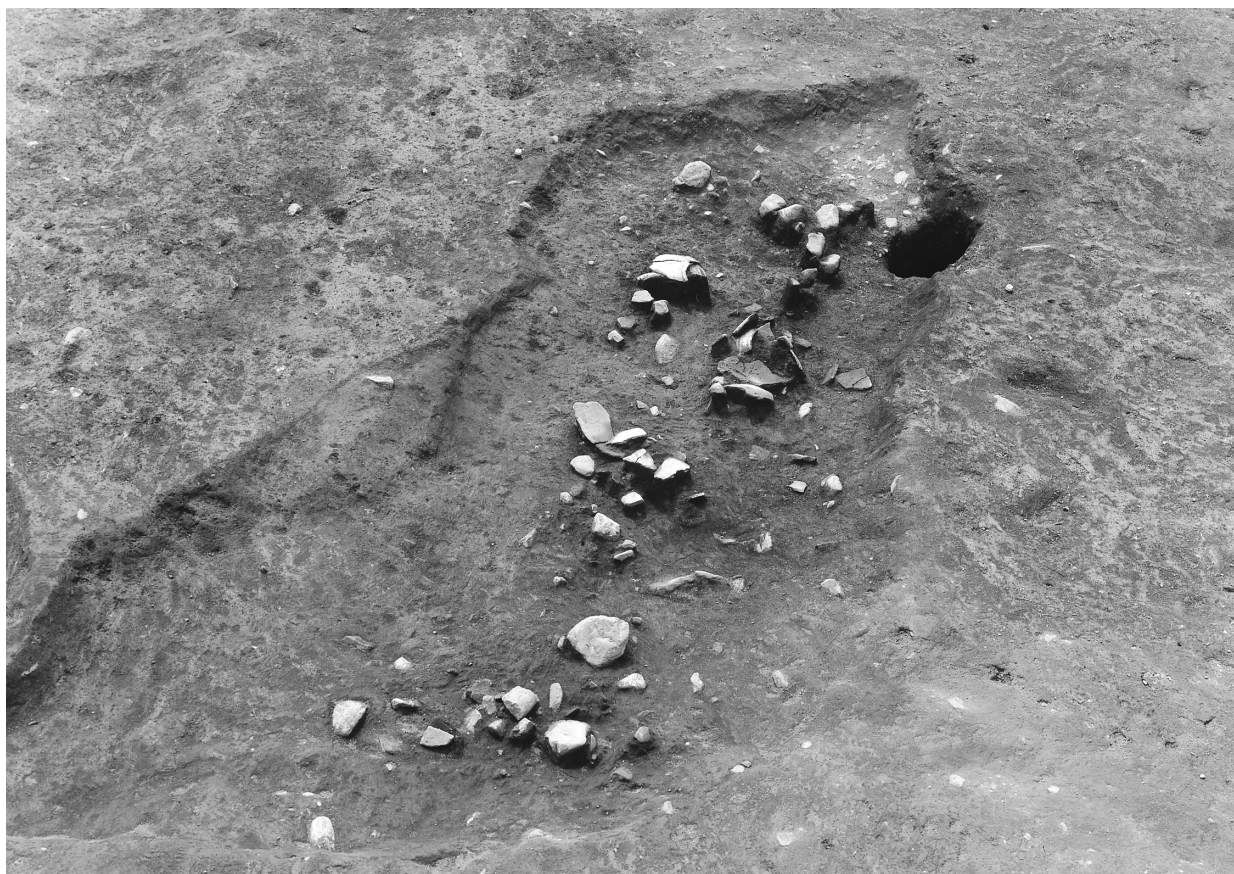




宮山遺跡F地区全景（南から）



宮山遺跡F地区S X 4 2 検出状況（北から）



宮山遺跡F地区S X 4 2 周溝土器出土状況（折返口縁壺、北から）



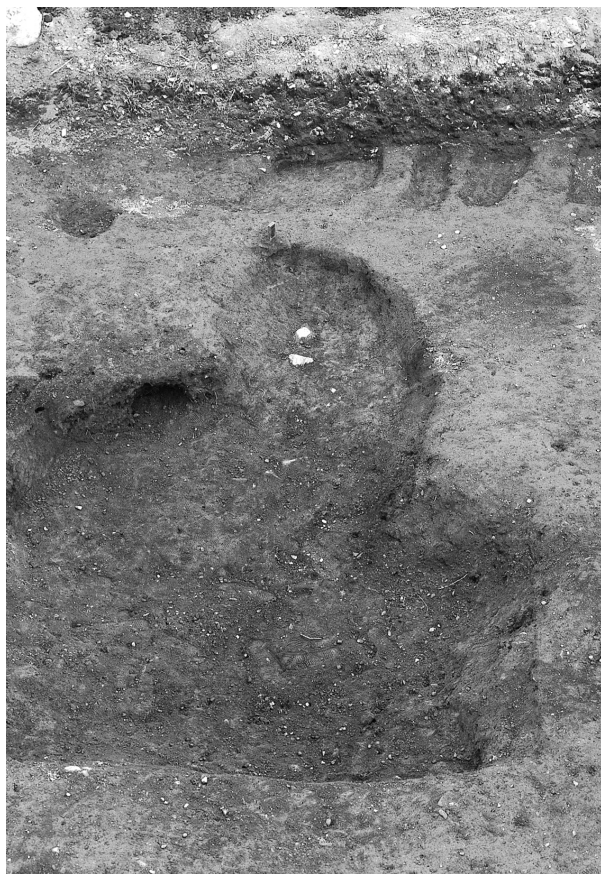
宮山遺跡F地区SX42（西から）



宮山遺跡F地区SX42（北西から）



宮山遺跡F地区SK 4 3 (北から)



宮山遺跡F地区SK 4 4 (西から)



宮山遺跡F地区SD 4 5 (南から)



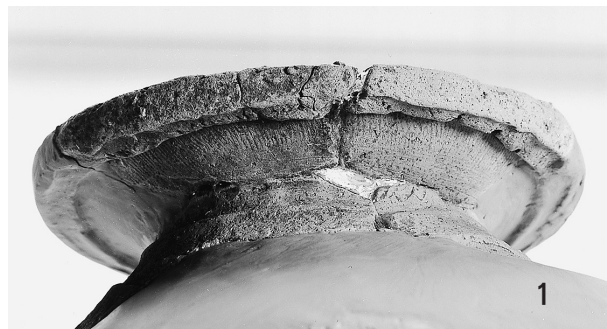
作業風景



作業風景



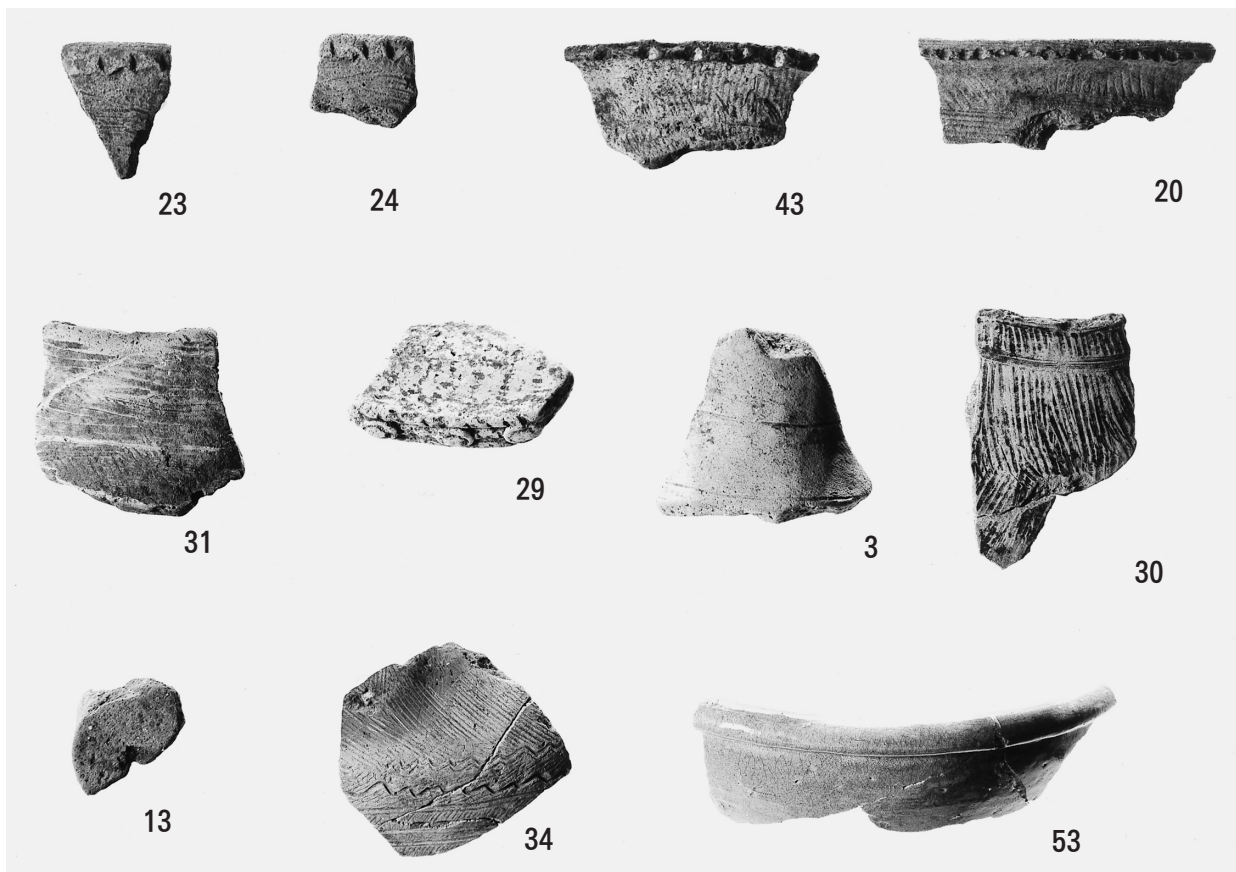
(折返口縁壺)



(折返口縁壺口縁部)



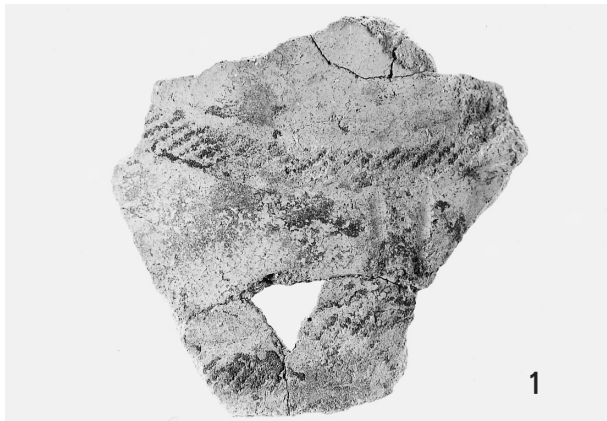
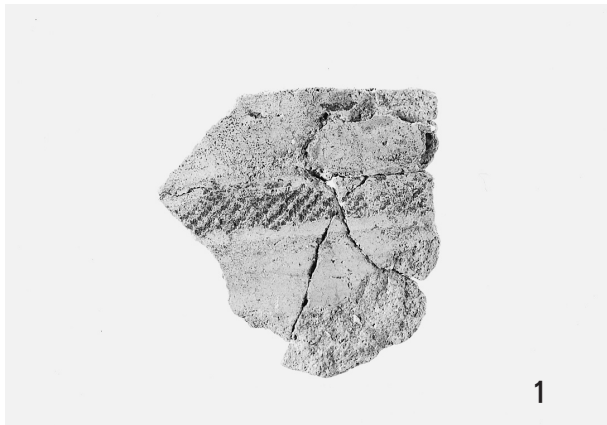
(玉砥石)



宮山遺跡F地区出土遺物



大久保城跡全景（南から）



大久保城跡出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな	みやまいせき (だい2じ) ・ おおくぼじょうあと							
書名	宮山遺跡(第2次)・大久保城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	186-5							
編著者名	山口聡嗣 片岡博							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 Tel 0596-52-1732							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやまいせき 宮山遺跡 (第2次)	いなべぐんだいあんちょう 員弁郡大安町 かたひあざみやま 片樋字宮山	243230	1	35° 07' 20"	136° 32' 00"	20010423 ～ 20010717	860	一般国道 475号 東海環状 自動車道 建設事業
おおくぼじょうあと 大久保城跡	いなべぐんだいあんちょう 員弁郡大安町 かたひあざおおくぼ 片樋字大久保	243230	102	35° 07' 12"	136° 32' 10"	19960826 ～ 19960927	1420	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
宮山遺跡 (第2次 - F地区)	墳墓	弥生～古墳		方形周溝墓 土坑		弥生土器、土師器 須恵器		中央陸橋型 方形周溝墓 折返口縁壺
大久保城跡	不明	不明		(V字形谷)		縄文土器 片刃磨製石斧		



三重県埋蔵文化財調査報告 186-5

一般国道475号  
東海環状自動車道建設事業に伴う

## 宮山遺跡(第2次)・大久保城跡

2003・3

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行

印刷 共栄堂印刷株式会社